

JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

CONTENTS ♣

はじめに／前野まさる 01
From the President / Masaru MAENO

2007 年次第 4 回拡大理事会報告(12/8)／赤坂 信 02
Report of the 4th Meeting of the Executive Board, 8th Dec. 2007
Makoto AKASAKA

日本イコモス国内委員会 2007 年次総会記録(12/8)／赤坂 信 05
General Assembly of Japan ICOMOS NC, 8th Dec. 2007
Makoto AKASAKA

研究討論会：The Spirit of Place — Between the intangible and the tangible — 20

(ICOMOS 16th General Assembly — Québec 2008 のテーマから)
報告者：前野まさる、山口博之、桑原佐知子、益田兼房、赤坂 信、土本俊和、下仲隆浩
コーディネーター：西浦忠輝

Reports and Discussion: The Spirit of Place — Between the intangible and the tangible —
(theme of the ICOMOS 16th General Assembly — Québec 2008)

日本の文化財保護とアメリカの歴史保存／金井 健 21
Cultural Properties Protection in Japan and Historic Preservation in the U.S.A. / Ken KANAI

ソウル崇礼門(南大門)放火焼失事件に関する緊急報告／李明善 23
Special Report on the Fire of the Sungnyemun (Namdaemun) Gate in Seoul / Myungsun YI

〈公開書簡〉ソウル南大門火災関連報告—日本との比較—／益田兼房 24
〈Open Letter〉About the Fire of the Namdaemun Gate in Seoul — Comparison between Japan and Korea — / Kanefusa MASUDA

ACCU 奈良主催の国際会議「文化遺産の危機管理Ⅱ」—自然災害への備えを考える—報告／益田兼房 26
Report of the International Conference organized by ACCU-Nara "Risk Management of Cultural Heritage II" — Preparedness against Natural Disaster — / Kanefusa MASUDA

シルクロード世界遺産登録に関するシンポジウム(中国、西安市)出席報告／大野 渉 27
Report of the International Symposium on Application for World Heritage Listing of the Silk Road (Xi'an China) / Wataru ONO

2007 年イコモス・プレトリア会議報告／岡田保良 29
The ICOMOS Meetings in Pretoria, 2007 / Yasuyoshi OKADA

「朝鮮通信使の道」展／三宅理一 30
"The Route of the Korean Envoys" Exhibition / Riichi MIYAKE

お知らせ 31
Announcements

事務局日誌 34
Diary

7 期—5 号



2008.03.14

はじめに
前野まさる



昨年の日本イコモス国内委員会の総会は、目黒の東京都庭園美術館(旧朝香宮邸)の新館ホールで開催されました。昨年を振り返ってみると、総会の報告ではISC(国際学術委員会)委員の皆さんが積極的に参加され日本の保存情報を発していらっしゃる様子が見られました。国内では、朝鮮通信使の文化の道を通り日韓参加の展覧会とシンポジウム、小委員会も、プロヴディフの歴史的建築の保存修復を扱う第5小委員会は最終段階に達し、第6小委員会は「瀬の浦」の国際的価値保全の調査研究を重ね専門家として客観的にまとめようとしている様子が見られます。

本年の活動方針として、担当理事の方から研究会を可能な限り多く開催する提案がありました。その理由は、「国際会議での日本からの発表がすくなく、日本イコモス国内委員会でもこうしたことに対応すべし」ということです。特に本年のICOMOS総会はカナダのケベック市で、テーマが「The Spirit of Place」と日本人にとって関心のあることで、皆さんに呼びかけをしました。すでに多くの方から事務局に報告がよせられ、今後のご活躍が期待されます。本年から来年にかけて、各種ISC(国際学術委員会)会議が日本で開催されているということで、皆様方のお力添えをお願いいたします。

2007年次第4回拡大理事会報告

2007年次第4回理事会(拡大理事会)が去る2007年12月8日(土)午前10時30分から13時まで東京都庭園美術館新館小ホール(東京都港区白金台)で開催された。出席者は、委員長:前野まさる、副委員長:杉尾伸太郎、西村幸夫、事務局長:矢野和之、理事:赤坂 信、清水真一、杉尾邦江、西浦忠輝、益田兼房、顧問:伊藤延男、本部執行委員:岡田保良、ISC:五十嵐ジャンヌ、大野 渉、花里利一の各氏が出席、事務局から秋枝ユミイザベル、山内奈美子両氏に加えインターン牧之段朝子氏が陪席した。報告事項、協議事項、審議事項は以下の通りである。

報告事項

1. シルクロード世界遺産登録に関するシンポジウム

中国西安市で2007年10月30日~31日に上記のシンポジウム(英語タイトルは“International Symposium for the Serial Nomination for the Silk Roads to the World Heritage”)について、資料に基づいて説明があった。このシンポジウムの詳細は本誌27~29ページを参照されたい。

2. 2008年ICOMOSケベック総会のプログラム

本年開催のケベック総会の予定は以下の通り(本誌20ページ参照)。

16th General Assembly and International Scientific Symposium

“THE SPIRIT OF PLACE — BETWEEN THE INTANGIBLE AND THE TANGIBLE”

September 29th to 4th October 2008

International Forum of Young Researchers and Professionals in Cultural Heritage 27-28/09/2008

International Scientific Committees' Day 29/09/2008

Opening Lectures 30/09/2008

Scientific Symposium 01-03/10/2008

16th General Assembly 04/10/2008

Post Conference Tours 05/10/2008

3. 会計報告

日本イコモス国内委員会2007年次会計報告について矢野事務局長から説明があった。本誌6頁を参照されたい。

審議事項

1. 入会者、退会者の承認

以下の入会者と退会者が承認された。

入会者 個人会員

氏名	所属	専門分野	推薦者
岩本健吾 (いわもとけんご)	文部科学省大臣官房 文教施設企画部 施設助成前課長	文化財行政・ 世界遺産学	前野まさる・矢野和之
小野寺英輝 (おのでらひでき)	岩手大学 工学部 准教授	技術社会史・ 工学史、 工学博士	前野まさる・矢野和之
毛利和雄 (もうりかずお)	日本放送協会 解説委員室 解説委員	ジャーナリスト (文化遺産)	前野まさる・益田兼房
趙 賢貞 (ノ・ヒョンジョン)	東京芸術大学 文化財保存学専攻 保存修復建造物研究室 博士課程後期	建造物保存、 工学修士	秋枝ユミイザベル・ メンドサ島田オルガ恵子
徐 旺佑 (ソウ・ワンウ)	東京芸術大学 文化財保存学専攻 保存修復建造物研究室 博士課程後期	史蹟整備、 工学修士	清水真一・ 秋枝ユミイザベル
西岡 聡 (にしおかさとし)	(財)文化財建造物保 存技術協会 事業部修復設計課 技術職員	文化財建造物の 修復、工学修士	斎藤英俊・花里利一
富永善啓 (とみながよしあき)	(財)文化財建造物保 存技術協会 事業部修復設計課 技術職員	文化財建造物の 構造検討及び補 強、工学修士	斎藤英俊・花里利一
岡橋純子 (おかはしじゅんこ)	ユネスコ本部 世界遺産センター 事業専門家	文化政策論・歴 史的都市保全 政策	西村幸夫・稲葉信子
備瀬ヒロ子 (びせひろこ)	(株)都市科学政策研究 所	地域計画・ 景観技術士	矢野和之・益田兼房



桑原佐知子 (くわはら さちこ)	地球環境パートナー シッププラザ	歴史的環境保 全・都市地域計 画修士	前野まさる・ 秋枝ユミイザベル
内藤 廣 (ないとうひろし)	東京大学大学院 工学系研究科 基礎学専攻 教授	建築設計・景観 設計、工学修 士、一級建築士	前野まさる・矢野和之
柳沢礼子 (やなぎさわ りよこ)	㈱文化財保存計画協 会 研究員	建造物修復設計	矢野和之・友田正彦

退会者

氏名	理由
河原純之	一身上の都合により

日本イコモス国内委員会 会員数 (2007.12.08 現在)
個人会員 : 322 + 12 - 1 = 333 名 維持会員 : 13 社

2. 小委員会新設

- 朝鮮通信使の道に関する小委員会 (主査: 三宅理一)
以下の小委員会の趣旨が提出され、審議の結果、承認された。

朝鮮通信使は、江戸時代を通して、徳川将軍の交替にともない朝鮮王室から慶賀のために江戸に派遣された外交使節です。約10カ月をかけて両国を往復しました。このような外交使節の存在は、鎖国の時代といわれた江戸時代に東アジアの間で豊かな国際関係が築かれていたことを物語っています。500人前後の朝鮮外交団に加えて、嚮導役の対馬藩士、各藩の随行員など、都合1500人が海路と街道を約10ヶ月をかけて動くことから、通信使の往来は華やかなページェントを散りばめた国際イベントとなり、多大の施設やインフラの整備をともなうこととなりました。そうした建築物や土木構築物の中には今まで継続されているものも少なくなく、全体で「朝鮮通信使遺産」とでも呼べるような遺産の系をかたちづいています。事実、日韓にまたがる「道」としての共同遺産は、サンティアゴ・デ・コンポステラに連なる巡礼の道と同様に、リニアな世界遺産としての価値をもつものであり、日韓両国でその体制づくりが求められています。2007年は最初の朝鮮通信使派遣からちょうど400年を経ており、日韓各地で400年行事が活発に繰り広げられています。

2007年7月11日に行なわれた国際シンポジウム「朝鮮通

信使の道を日韓共同の世界遺産へ」を通して日本ならびに韓国のICOMOS国内委員会においてそのための小委員会を設置して共同作業を行なう旨が確認され、その体制づくりをすみやかに行なう必要ができました。今回の提案はそのための第一段階として位置づけられます。

- 飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群の保存と景観環境の造成に関する研究班 (主査: 佐々波秀彦)

小委員会の設立趣旨が提出され審議されたが、若干の調整を要するため、継続して審議することになった。

協議事項

1. 協力依頼

- 2011年のICOMOS General Assembly開催地候補について
イコモス本部からの2011年開催地募集の手紙が紹介された。協議の結果、日本は見送ることになった。
- 共催事業として2件が協議された
 - ・三重県教育委員会 教育長より「座談会 文化的景観から見た熊野古道」の共催依頼
 - ・日本建築学会理事 三宅理一、日本建築学会建築博物館特別企画「朝鮮通信使の道」展の共催依頼
協議の結果、上記2件が承認された。
- ICOMOS Charter on Interpretation and Presentation 関係事例の紹介依頼
門林理恵子氏からICIP (Interpretation and Presentation of the ISC) の会員向けに Interpretation and Presentation に関するイコモス憲章承認に向けて大きく前進し、今秋開催されるケベックのイコモス総会に向けて準備していることを伝える文書が紹介された (本誌15ページ参照)。文書中に地名を付したCharterがあったが、これに対して名称の混乱を避

けるために Charter は Venice Charter (ヴェニス憲章) だけにしてほしいという意見があった。

2. 次回本部役員選挙

2008年ケベック総会において現執行委員岡田保良氏を推挙の提案があり、承認された。

3. 名誉会員推薦

2008年ケベック総会において坪井清足氏を推薦する提案があり、承認された。

4. 2009年リージョナルミーティング開催について

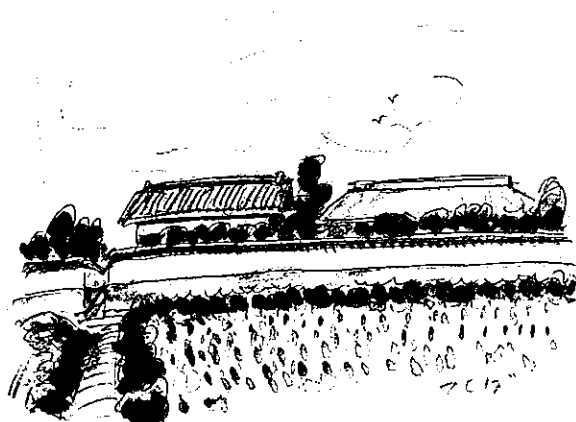
2009年6月に Cultural Landscape の ISC の日本開催が決定している。

5. 日本イコモスの公益法人化について

来年12月に新たな公益法人制度の運用が始まりますが、2008年次に公益法人化への準備研究を行ないたいと思っております。規約の改正、活動費の確保、事務局機能の強化等課題は多く存在しており、かなりの仕事量となりますので、皆様のご協力をお願いします。(矢野事務局長)

6. 足達基金

日本イコモスの創設に尽力された足達富士夫先生のご遺族からの申し出があり、文化遺産保存の研究活動のために寄付をいただけることになりました(500万円を予定)。事務局としては口座を開き受け入れ準備をしております。今後この基金の運用について次回の理事会で協議させていただきたいと考えています。(矢野事務局長)



イラスト/前野まさる (以下全て)

日本イコモス国内委員会 2007 年次総会記録



日本イコモス国内委員会 2007 年次総会が、去る 12 月 8 日(土) 13 時 30 分から 15 時 30 分まで東京都庭園美術館新館大ホール(東京都港区白金台)で開催された。出席者は 48 名、委任状 148 通を合わせて 196 名で、過半数に達しているため、総会は成立した。議事は報告事項と審議事項、さらに協議事項に分けて進められた。

報告事項

1. 2007 年次 一般報告

(1) イコモス本部報告

下記4の「ICOMOS 国際会議 2007 年次報告」(本誌 8 ~ 9 ページ参照) で一括して報告する。

(2) 理事会

2007 年次の拡大理事会の会議内容は、JAPAN ICOMOS INFORMATION 誌 7 期 1 ~ 4 号に掲載されているので参照されたい。

(3) 担当理事報告

会員担当(杉尾伸太郎、田辺征夫理事)

会員の動向は以下の通りです。

	個人会員	団体会員	維持会員		名誉会員 (顧問含)
			国際	国内	
2006 年度 12 月末	300	0	0	14	4
2007 年度 11 月 28 日現在	322(+24-2)	0	0	13 (-1)	4
12 月 8 日	入会 12 退会 1				
	333	0	0	13	4

(杉尾伸太郎)

渉外担当(西村幸夫理事)

海外からのイコモス会員の来訪にあたっては、適宜歓迎会などの接遇の機会を設けてきました。たとえば、平泉に評価ミッションでこられたスリランカのウィーラシンハ氏のほか、伊藤延男氏や前野まさる氏、杉尾伸太郎氏などです。石見銀山の登録を巡る動き等に関しては、拡大理事会の席上などで、適宜情報交換を実施してきました。(西村幸夫)

事業担当(西浦忠輝、西村幸夫、清水真一理事)

研究会、講演会等を可能な限り多く開催し、本委員会の会員数、予算的制約等に鑑み、他機関、団体等との共催を積極的に行なうとの基本方針のもと、以下の事業を行いました。

I 主催事業

① 講演会 “Structural Restoration of Architectural Heritage in Iran with Focus on the Bam Citadel”

2007 年 1 月 30 日(火) 東京都千代田区

② 研究会「富士山の世界遺産暫定リスト登録について—現状と課題—」

2007 年 4 月 18 日(水) 東京都千代田区

③ 見学会・研究会「歴史的建造物保存修理と復元展示における構造補強について」

2007 年 4 月 21 日(土) 奈良県奈良市

④ 見学会・意見交換会「平泉—浄土思想を基調とする文化的景観(世界遺産暫定リスト)」

2007 年 5 月 27 日(日) 岩手県平泉町

⑤ 見学会・意見交換会「武家の古都・鎌倉と文化財(世界遺産登録予定)」

2007 年 10 月 28 日(日) 神奈川県鎌倉市

⑥ 研究会「“THE SPIRIT OF PLACE”:2008 年 ICOMOS 総会・シンポジウムに向けて」

2007 年 12 月 8 日(土) 東京都港区

II 共催事業

① 座談会「文化的景観から見た熊野古道」

主催：三重県教育委員会

2007 年 8 月 11 日(土) 三重県

② 特別講演会 “Heritage and Development; The Experience of Krakow”

2007年9月8日(土) 京都府京都市

Ⅲ 後援事業

① 「エチオピア歴史遺産会議 2007」

主催：日本経済新聞社他

2007年4月12日(木) 東京都港区

② 国際シンポジウム「朝鮮通信使の道を日韓共同の世界遺産へ」

主催：「鞆の世界遺産実現と活力あるまちづくりをめざす住民の会」を支援する会

2007年7月1日(日) 東京都港区

③ シンポジウム「平泉の景観—いまとこれから」

主催：平泉町世界遺産推進協議会

2007年7月28日(土) 岩手県平泉町

④ 第1回文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ

主催：動体計測研究会

2007年9月7日(金) 奈良県奈良市

⑤ 第30回全国町並みゼミ伊勢大会

主催：特定非営利活動法人 全国町並み連盟

2007年9月14日(金)～9月16日(日) 三重県伊勢市

⑥ 韓国文化遺産スタディツアー<北中部編>

主催：NPO 法人文化財保存支援機構

2007年9月15日(土)～18日(火) 韓国ソウル市他

⑦ 「平泉」世界遺産フォーラム—「平泉」を未来へつなぐ—

主催：平泉町

2007年11月4日(日) 岩手県平泉町

⑧ ユネスコ・チェア「文化遺産と危機管理」国際研修

主催：立命館大学歴史都市防災研究センター

2007年11月5日(月)～17日(土) 京都府京都市

Ⅳ 協力事業

① 国際会議「文化遺産の危機管理I」—今、世界の文化遺産は大丈夫か—

主催：ユネスコ・アジア文化センター

2007年1月31日(水)～2月2日(金) 奈良県奈良市

(西浦忠輝)

広報担当(赤坂 信、黒田乃生、濱崎一志理事)

JAPAN ICOMOS/ INFORMATIONの7期1号から4号までを発行し、拡大理事会の討議内容や国際学術委員会(ISC)関連の記事、世界遺産登録候補地の現地見学と意見交換会の報告、また会員からの投稿などを掲載しました。広報に関して本年度で特記すべき事項は、8月1日に日本イコモスのホームページ(www.japan-icomos.org)を開設したことです。開設後の状況についてはJAPAN ICOMOS/ INFORMATIONの7期4号に関連記事を掲載していますが、8月中で259人のホームページへの訪問者があり、最多の訪問者は一日で22人(8月27日)でした。小委員会活動の様子が、ホームページ上で写真などのビジュアルな情報とともに、より詳細に知ることができます。ホームページの開設は情報のスピードと伝搬という広報の機能を飛躍的に向上させることとなります。こうした特長を生かした広報活動を心がけたいと思います。

・2007年8月1日 日本イコモス国内委員会のホームページを開設

・2007年10月10日 第6小委員会のページを開設

(赤坂 信)

2. 2007年次会計報告

庶務会計担当(矢野和之事務局長、渡邊保弘理事)

今年は、ホームページの立ち上げの費用がかかったことで赤字となりましたが、これは今まで手を付けていなかった日本コンラクトブリッジ連盟からの寄付金が繰り越されていたものを利用させていただいたからです。

本年から本部への送金が40ドルから40ユーロ(約6500円)となり、実に会費の三分の二を本部送金に当てざるを得ない状況にあります。今後個人会員の会費を上げずに運営を続けるためには、賛助会員を増やすなどの対策をたてる必要があると思われます。

また、活動強化のために何らかの収入を得ることを議論していく必要があります。(矢野和之)



3. 日本イコモス国内委員会 2007 年次 会計監査報告

日本イコモス国内委員会 2007 年次会計報告 (2006/12/01~2007/11/30)

1. 前年度より繰越		2,231,701 円
2. 収 入		
会費		3,000,000 円
会員会費	1994 年~2005 年分	30,000 円
	2006 年分	70,000 円
	2007 年分	2,840,000 円
	2008 年分	60,000 円
維持会員会費		700,000 円
国際会議助成金		376,147 円
雑収入		74,080 円
寄付金		241,125 円
普通預金利息		2,384 円
定期預金利息		27,601 円
合 計		4,421,837 円
3. 支 出		
ICOMOS 本部年会費 (30-40 ユーロ×304 人)		1,859,730 円
会議費 (総会・理事会・研究会他)		154,545 円
国際会議費		376,147 円
INFORMATION 誌 (編集・印刷費、4 回)		887,565 円
通 信 費 (HP 立ち上げを含む)		678,103 円
事務用品費		54,787 円
事務局人件費 (交通費を含む)		809,730 円
合 計		4,820,607 円
4. 収支 (収入-支出)		-399,270 円
5. 次年度へ繰越		1,819,931 円
6. 銀行預金残高		
定期預金 (イコモス研究振興基金)		12,550,000 円
普通預金		1,819,931 円
計		14,369,931 円

以上の通り報告します。2007 年 11 月 30 日

会計担当理事

矢野和



渡邊保



会計監査欄

2007 年 12 月 6 日

監事

前田耕作

会計報告の通り、間違いがないことを確認いたしました。(前田耕作監事)

4. ICOMOS 国際会議 2007 年次報告

2007年次に行なわれた日本イコモス会員が関与した主な国際会議は以下の通りである。

■ 2007 年 ICOMOS 執行委員会 報告

● 1月19日～23日 (パリ本部)

2007年次世界遺産パネル会議 (19日～20日)、及び
定例執行委員会 Executive Committee (21日～23日)

● 5月30日～6月1日 (ソウル) (招待)

アジア太平洋地域会議 Regional meeting、テーマ：巨大都市と歴史遺産 (西村幸夫氏基調講演)

● 10月6日～13日 (南アフリカ共和国、プレトリア) (文化財保護・芸術研究助成財団による助成)

学術評議会 Scientific Council (7日～8日、気候変動に関する学術シンポジウムを含む)、及び

定例諮問委員会 Advisory Committee (9日～11日、アフリカ会議と地域会議を含む)、及び

執行委員会 Executive Committee (12日～13日)

● 10月27日～11月31日 (中国、西安) (招待)

大明宮歴史公園園化計画に関する学術フォーラム (27日～28日)、及び

シルクロードの世界遺産申請に向けての国際シンポジウム (30日～31日)

● 11月29日～12月1日 (パリ本部)

2008年次世界遺産パネル会議。23件の新規申請と5件の追加申請を審査。

今回から執行委員会とパネルの開催を切り離すことになった。

(岡田保良)

■ 2007 年 ICOMOS 諮問委員会報告

2007年のICOMOS諮問委員会は10月6日～11日の間、南アフリカ共和国の首都プレトリア市のプレトリア大学を会場として開催された。

7日に開催された Scientific Council のシンポジウムは、“Global Climate Change” をテーマとして行なわれた。参加者は43名であった。近年の地球的温暖化現象が極地の氷解、海水位の上昇によって海岸が浸食され、陸地が減少し、住民は勿論自然と文化的景観に大きな影響が出ていることが報告された。また、カナダからも豪雨で川沿いの工場の水

害、町の浸水、白熊が食糧難で減少したこと。気候の変動はハリケーンとしても異常で、ニューオーリンズでも年々被害が大きくなりつつあるとの報告があった。今後は、人命はもちろん文化遺産保護対策の事例報告が待たれるところである。

8日の Scientific Council では ISC の活動状況を年報として出版することが、各 ISC の状況を知る上で重要であることが論議された。ICOMOS CHINA は出版計画を立てていること、CIPA は Getty の助成で3件の出版を計画。Dinu Bumbaru 氏からは3年毎の Action Plan が提案された。

なお、9日は諮問委員会と地域会議が開催された。

● 文化遺産の保存と保護について

① 新しい保存のテキストのための情報交流、② ICOMOS としての世界遺産保護強化の Action Plan をたてる、③ ICOMOS として世界遺産の保護監視体制を立ち上げる、④ ICOMOS の人材教育、訓練の推進、⑤ ICOMOS を元気づける積極的な出版の実現

● 組織について

① 組織相互の情報交流を図る、② 財政問題を確立する、③ 専門家を拡充する、④ UNESCO、ICCRROM、大学などとリンクしパートナーシップを築く、⑤ ICOMOS の将来像を築く

● 諮問委員会

Scientific Council と同じように、メンバーの強化、ISC の活性、情報発信として出版の重要性が論議された。

● 地域会議

日本イコモス国内委員会の活動について報告した。国際的には ICOMOS 法制・財政・行政委員会 (広島市 2006 年 11 月) を後援、朝鮮通信使の国際会議 (7 月)、UNITAR 研修参加者 (Afghanistan) と文化遺産の保存に関する TV 討論などを行なった。理事会は熊野 (3 月)、平泉 (5 月)、東京 (9 月) と行ない、研究会は理事会の後で行なっていること、2009 年には ICOMOS の CIPA の会議とアジア太平洋地域会議を開催する予定であることも報告した。

韓国 ICOMOS では Monitoring を現在も続けている。中国は、西安で Silk Road 会議を開催すること、中国の世界遺産の Monitoring、中国大運河保存の計画も報告された。

(前野まさる)



■その他

●国際シンポジウム International Symposium on the Concepts and Practices of Conservation and Restoration of Historical Structures of the World Heritage Sites in Beijing

2007年5月25日～28日 中国北京市 主催：中国国家文物局（SACH）、世界遺産センター、ICCROM。日本イコモスからの参加者4名（伊藤延男、清水真一、稲葉信子、秋枝ユミイザベル）、3編発表

●国際シンポジウム「絲綢之路申報世界文化遺産系列活動会議」 International Symposium for the Serial Nomination for the Silk Roads to the World Heritage

2007年10月30日～31日 中国西安市 主催：ICOMOS、中国国家文物局（SACH）、陝西省人民政府、西安市人民政府。日本イコモスからの参加者3名（前田耕作、大野渉、山内和也）

5. 各国際学術委員会（ISC）及び小委員会報告

(1) ICOMOS 国際学術委員会(ISC)2007年1月～12月 Analysis and Restoration (ISCARSAH 建築遺産構造解析：花里利一、坂本 功、西澤英和)

建築遺産の構造修復と解析に関する国際学術委員会(ISCARSAH)では、年2回の委員会を開催している。2007年は6月に米国・シカゴ、9月にトルコ・アンタルヤで開催された。シカゴ会議（日本委員は参加せず）では、主に各国委員の活動報告がなされた。議事録によれば、報告内容は、イタリアの耐震基準の動向、来年のイコモス・ケベック会議に向けた活動、ISO13822の改訂に向けた活動、メンバーシップの改定案などであった。ISO13822（構造設計の基本—既存建造物の性能評価に関する規格）の改訂では、歴史的建築物に関するANNEXを新たに加えるためにISCARSAHのワーキンググループ（Safety Group）が数年前から活動している。このISO13822の改訂では、3年後の改訂を目標として、ISO/TC/98/SC2/WG6の国内対応作業部会（主査：三橋博三東北大学教授）が発足し、日本イコモスから岩崎好規氏と花里利一が委員として参加することになった。経緯等の詳細は、7-3号イコモス・インフォメーションに岩崎氏が報告している。9月のISCARSAHアンタルヤ

会議（日本イコモスからは花里が出席、詳細はイコモス・インフォメーション誌で報告予定）では、国内作業部会の審議結果に基づいたANNEXの草案（原案はISCARSAHのSafety Group作成）を提出したが、各国委員から活発な意見が出された。その後、草案はISCARSAH委員の意見をふまえて国内対応作業部会で修正され、11月に開催されたISO/TC98マドリッド会議の国際作業部会で審議されている。

国内の活動では、日本イコモス国内委員会と奈良文化財研究所の共催による『歴史的建造物保存修理と復元展示における構造補強について』見学会と研究集会在が挙げられる。唐招提寺金堂の修復工事と大極殿正殿の復元事業を見学した後、坂本功氏のコーディネートによる研究集会在が開催された。研究集会在では、坂本氏による文化財建造物の構造と補強に関する講演の後、唐招提寺と大極殿の報告や活発な討議が行なわれた。詳細は、7-2号イコモス・インフォメーション誌で報告している。（花里利一）

Historic Towns and Villages (CIVVIH 歴史的町並み集落：福川裕一、上野邦一)

CIVVIHの2007年度は、4月17日～21日、フィンランドのヘルシンキで大会が行なわれた。タイトルは、Urban Heritage Facing Global and Local Challengesで、Historic Urban Landscape (HUL) がもつぱらの議論の対象となり、それをめぐって各発表があり、かつ討議された。福川は「The Meaning of Historic Urban Landscape」と題して、江戸（東京）と佐原をとりあげ、自然的基盤と町並みとの関連を論じた。Historic Urban LandscapeについてはCharte de WashingtonそしてVienna Memorandumをめぐる熱い議論が展開。CIVVIHからその修正意見を積極的に提案していくことが確認された。総じてフランス語圏からはあえてHULという概念をもちだすことに懐疑的な意見が出された。このテーマはしばらく尾を引きそう。来年はケベックが会場。（福川裕一）

Underwater Cultural Heritage (ICUCH 水中文化遺産：荒木伸介)

今年度のICUCH会議は10月27日～28日の2日間にわたり、BrazilのItaparicaで開催された。私は、去年のDubrovnikの会議に続き、諸般の事情から、またしても欠席

せざるを得なかった。

今年には議長を務める Robert Grenier 氏も欠席され、事務局を担当する David Nutley 氏が出席者の合意を得て、議長を代行され、会議が進められた。議題、協議、結果などについてはその要約が Nutley 氏から全ての会員に対し e-mail で送付される。特に紹介すべき内容は無いが、いろいろな地域での水中文化遺産に関わる活動の情報交換が行なわれた。また、2001年に UNESCO が制定した「水中文化遺産保護条約」の批准推進に、UNESCO が IUCN の協力を得て本年4月に Sri Lanka で開催された若手研究者を対象とした研修会、これに引き続き Experts meeting (荒木参加) はきわめて有効な手段であり、向後も協力していくことが決定された。(荒木伸介)

Cultural Landscapes ICOMOS-IFLA (文化的景観国際学術委員会イコモスイフラ：杉尾伸太郎、本中 眞)

文化的景観国際学術委員会 (ISC on Cultural Landscapes 又は ICOMOS-IFLA) の 2007 年会合が、2007 年 11 月 27 日 (火) 及び 28 日 (水) にコスタリカ共和国サンホセにおいて開催された。日本イコモス国内委員会からは、杉尾伸太郎 (日本代表・副会長) が voting member として出席し、日本イコモス国内委員会の 大野 渉氏が同行した (2003 年ドイツ会合以降 4 回目)。イタリア (会長)、アルゼンチン (副会長)、スペイン、ノルウェー、アメリカなど合計 11 カ国 13 名の出席があった。アジア・オセアニア地域からは日本、イランが出席した。本年の会合はもともとノルウェーでの開催を予定していたが、主催者側の準備が間に合わず急遽コスタリカで開催することとなったことや委員の多くが生活するヨーロッパから遠いこともあり、通常出席しているメンバーの欠席が目立った。

会議では、① 文化的景観に関する世界遺産現地調査技術指針の検討へ向けたワーキンググループの設置、② 新しい規約に則った新規委員の選出、③ Historic Urban Landscape に関する最近の議論・国際会議の動向についての報告、④ ICOMOS-IFLA ホームページ (<http://www.icomos.org/landscapes/>) の運営状況などについて討論、意見交換が行なわれた。

今回、新規約に基づいた委員の選出が行なわれ、新たに

17 人のメンバーが加わることとなった。また、中国、韓国代表を含む 5 人のヴォーティングメンバーが新たに選任された。文化的景観国際学術委員会関連の 2007 年の活動 (動向)
—2007 年 2 月 23 日 Japan IFLA 総会
—2007 年 4 月 26 日～28 日 オーストリア共和国ウィーンで ICOMOS/IFLA (文化的景観国際学術委員会) 臨時会合出席 (既報のとおり)
—2007 年 8 月 24 日 「平泉」の ICOMOS 現地調査に来日した ジャガス・ウィーラシンハ氏 (スリランカ) と懇談、視察協力
—2007 年 11 月 7 日 ICOMOS/IFLA (文化的景観国際学術委員会) のポルトガル代表、クリスティーナ・カステルブランコ夫人他 1 名来日・懇談及び都内庭園の視察協力
—2007 年 11 月 27 日～28 日 コスタリカ共和国サンホセで ICOMOS/IFLA (文化的景観国際学術委員会) 年次会合出席 (今回報告) (杉尾伸太郎)

Vernacular Architecture

(CIAV 民家：前野まさる、大野 敏)

本年の CIAV 2007 年次会議は棚田で世界遺産となったフィリピンのルソン島の北にある Ifugao 県の Banaue で開催される。テーマは “preserving traditional landscape” である。Banaue は棚田と棚田の麓に建つ茅葺きの民家による文化的景観である。この Banaue の棚田の世界遺産が危機遺産と認定されていることによって求められたテーマであろう。

日程は 12 月 3 日から 8 日の 6 日間であるが、3 日と 8 日はマニラ、Banaue 間の移動に費やされ、4 日、7 日は Banaue 周辺の景観視察、研究発表とワークショップは 5、6 日の 2 日間である。日本からは 2 人の研究報告がプログラムに上がっている。

日本の棚田は一部保存されてはいるが、多くは果物畑になったり、休耕田となってしまった。棚田という農作業は大変きついものである。これを如何にして活かし守り続けているのか、他国の事例をじっくり聞きたいと思っている。

(前野まさる)

Wood (IIWC 木の委員会：伊藤延男、渡邊保弘)

第 16 回国際集会及びシンポジウムの報告



表記の会が、2007年11月11日から16日までイタリアにおいて行なわれた。会は、二部に分かれ、第一部は、11日より14日までのフローレンスにおけるシンポジウム、IWC委員会、及び市内文化遺産見学等であった。第二部は、15、16両日にわたるヴェニス、ヴィチエンツァへのバス旅行であった。日本からは、委員である渡邊保弘氏、土本俊和氏、それに伊藤延男が参加したが、他に飛び入りで二名の方が参加した。

まず、第一部について述べる。

11日には夕刻出席者の為のカクテルパーティーがあった。会場にはユネスコの事業として作成された世界遺産である木造建築物、構造物の紹介パネルが多数展示されていた。まことに有意義なパネルであったが、イタリア語を主としているのは残念であった。日本語でこのようなものを作成したいものである。

12日は、午前中パラッツォ・ヴェッキオの見学で、とくにその屋根裏のトラス構造の見学が圧巻であった。前からイタリアではトラスの歴史が分かり、面白いと国内委員会の会報でも宣伝しておいたが、まさに期待通りであった。それにしても今回の会議に建築構造の専門家、関心のある方々の参加がなかったのは、大変残念なことであった。さて午後は、「花の大聖堂」の見学。ここでは木のことは忘れて（ドーム内に意味の分からない木の部材があるが）その大きさに驚き、頂上よりの景観を楽しんだ。

13日は、開会行事ののち、終日シンポジウム。発表は31件に及び、そのために一人当たりの時間が15分に制限されたのは、やむを得ないとはいえ、残念であった。今度のシンポジウムではテーマを「材料から構造まで—木造構造物の力学的挙動と欠点」に絞られた。日本人では伊藤と土本氏が発表した。伊藤は、「水平力—特に地震に対する日本建築の抵抗技術の歴史的回顾」と題し、掘立柱、礎石立柱、土壁、長押、貫、筋交等や近年の耐震補強の問題を論じた。土本氏は、新潟地震の被害調査を元に、礎石立ちの効用を論じられた。各発表を公平に聞いていると、レベルの低いものなきにしもあらずであったが、総じて大変科学的な発表会であって、有意義であった。私のかねての持論であるが、ISCとしては、このような地道な基礎的研究を行なうのが一つの大きな仕事であると、改めて感じた次第である。

14日は、午前中IWCボードミーティング。伊藤だけ出席した。この席で、IWCの規約が極めて古いので、エゲル—西安プリンシプルズに基づいて改訂すべきこと、その為の小委員会を立ち上げるべきことを提案した。幸いに出席者の賛同を得て、私とその委員長を命じられた。（現在改訂第一草案を作成中である。）さて、午後はサンマルコ協会の木造トラス見学。ここでも興味深い所見があった。

15日は早朝5時にバスで出発、ヴェニスへ直行し、午前中付近の島々の教会等見学。鄙びた小教会の天井やトラスを見ていると、初期キリスト教会のイメージが透けて見えるような感じがした。確かカロリング朝の木造教会遺跡が多数発見されていると聞いたことがあるが、その成果と組み合わせることが出来るならば、幻の初期キリスト教木造教会の姿が脳裏に浮かんでくるのではなからうか。午後はヴェニス本島に入り、セント・ステファノ教会、パラッツォ・デイ・ドギ、セント・マリア・グロリオサ・デイ・フラリ教会、セント・ジャコモ・デロリオ教会等を足早に見学した。既に夕景に入り、パラッツォでの夜景などまるで夢の国にいるような美しさであった。ヴェニス泊。

16日は、ヴィチエンツァへ。ここはパラディオ作品で世界遺産。有名なオリンピック劇場及びパラッツォ・チエリカティ見学。フローレンスに帰着、解散。

かくして行事は総て終了。今回の会合はたいへん充実した内容で、学術的にも極めて有意義なものであった。この会合を企画されたゲンナロ・タンポーネ教授（IWC事務局長）とそのスタッフのご苦勞に対し心から感謝の意を表したい。

（伊藤延男）

Earthen Architecture（土の建築：岡田保良）

新委員長 John Hurd 氏のもと、未だ委員会組織を整備している段階。再発足した2006年のBoard member 20人を三役、5つの分科会に再編するとともに、新たに4人のExpert memberと2人のCorresponding memberを選出。

（岡田保良）

Legal, Administrative and Financial Issues (ICLAFI 法律・行政・財政問題：河野俊行)

2007年の法律・行政・財政問題委員会は、ルーマニア

のシビウで、11月1日～4日の期間に開催された。テーマは「歴史的モニュメントの保存における助言機関の役割／行政と助言機関の関係」であった。河野は大学の用務の関係で参加できなかった。(河野俊行)

Heritage Documentation

(CIPA写真測量文献：山田 修)

2009年CIPA京都に向けた活動として「第1回文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ」を2007年9月7日に東京大学生産技術研究所で行ない、日本イコモス国内委員会にも後援になっていただいた。今後関東、関西交互に開催予定。(山田 修)

Cultural Routes (CIIC文化の道：杉尾邦江、大野 渉)

2007年次の活動は2008年カナダ、ケベックで開催されるイコモス総会に提出予定の“Project for an International Charter on Cultural Routes”の最終検討が行なわれ、草稿が完成した。定例のミーティングは開催されなかった。(杉尾邦江)

Stone (ISCS石質遺産：西浦忠輝、石崎武志)

2007年には下記の2回の委員会が開催された。

- ・5月4日～5日 エディンバラ (イギリス)
 - ・11月30日～12月1日 プラハ (チェコ)
- 委員会の主な議事は下記の通り。
- ・石の劣化と保存についてのグロッサリーの製本に向けての寄付金集め
 - ・グロッサリーは英語、仏語で完成しているが、独語、西語版作成に向けての翻訳作業
 - ・2008年のICOMOSシンポジウム及びSTONE 2008シンポジウムでのISCSとしての発表について
 - ・2009年か2010年に国際シンポジウム「屋外石彫物の保存」の開催に向けての企画
 - ・ブックレット「石の保存」作成に向けての企画
 - ・委員構成の変更について

上記2回の委員会には残念ながら日本の委員(西浦、石崎)は参加できなかった。その主な理由は、開催時期に日本を離れることができなかったことによる。開催場所は比較的

早めに決定するが、日程が決まるのが遅いため、遠隔地の日本からの参加が困難であるケースが多いことから、決定を早めるように要請しているが、今のところ改善されていない。(西浦忠輝)

Risk Preparedness (ICORP防災：益田兼房)

文化遺産防災国際学術分科会ICORPは、5月18日から20日、インド・イコモスの支援を得て、ニューデリーのレッド・フォートで開催された。日本からは、ICORP日本Voting Memberである益田と、大窪健之京都大学准教授が出席した。海外からの参加者は、他に委員長代理のデヌ・ブンバル、書記のロビン・リディット(豪)、イコモス学術分科会担当理事のジョン・ハード(英)。テーマは、1. Identification and documentation of risks for heritage, 2. Preparedness and preventive measures, techniques and methods, 3. Emergency and post-disaster situations management, 4. Traditional knowledge and modern obligationsであり、さらに21日の気候変動と文化遺産のテーマでインド政府自然災害危機管理研究所と考古局が共催する研究集会に参加した。ICORPは10年の活動歴を持つが、まだ正式手続きが終わっていない変則的な分科会である。秋のプレトリアでの執行委員会で正式の分科会となるように、規約の準備、執行部の候補を決め、委員長はデヌ・ブンバルとロヒト・ジギヤス(印)が共同委員長、書記はロビン・リディット、日本は益田が研修担当理事となった。しかし、プレトリアでの会合の結果はまだ報告がない。

日本では、上記のニューデリー会議でも報告したが、11月5日から17日までの2週間、ユネスコチェア文化遺産危機管理国際研修を、立命館大学歴史都市防災研究センターで開催した。これは、初年度の昨年と同様に、日本イコモス国内委員会と共催し、かつ国際イコモス(ICORP)の後援名義をもらっており、ユネスコとイクロム、エイジャン・アカデミーの後援名義も得ている。今年の参加者は、バングラデシュ・中国・フィリピン・ペルーの4カ国から、世界遺産等の管理を担当する文化遺産専門家と防災分野の専門家の2名ずつ、合計8名である。海外講師には、上記のロヒト・ジギヤス博士、ユネスコ世界遺産センターのジョヴァンニ・ボッカルディ、イクロムのジョセフ・キングなどが参加いただいた。詳



細は、日本イコモス国内委員会に報告を提出しているので、ご参照いただきたい。(益田兼房)

Rock Art

(CAR-ICOMOS 岩面画：小川 勝・五十嵐ジャンヌ)

2007年6月、イコモス岩面画委員会のテーマ報告書『Rock Art of Sahara and North Africa』作成。
(ホームページ<http://www.icomos.org/studies/rockart-sahara-northafrica.htm>よりダウンロード可)

<国内での岩面画委員会 2007年度活動報告>

岩面画研究会総会

日時：2008年1月26日(予定)

場所：早稲田大学(予定)

内容：探検家であり写真家でもある石川直樹氏に話題提供していただく。石川氏は2007年10月に『NEW DIMENSION』(赤々舎)を刊行され、日本、ノルウェー、フランス、アルジェリア、インド、オーストラリア、ハワイ島、アメリカ、メキシコ、チリやアルゼンチンなどで撮影した岩面画などの写真を発表している。石川氏を囲んで、世界の岩面画の現状、問題について議論。(五十嵐ジャンヌ)

(2) 小委員会

憲章小委員会：第1小委員会(主査：藤井恵介)

本年の活動は、委員が多忙ゆえに、全体会合は開かなかった。各委員において、個人的に、憲章に関する検討をお願いした。(藤井恵介)

プロヴディフ旧市街保存事業協力班：第5小委員会(主査：石井 昭)

本小委員会の活動については日本イコモスのホームページに掲載されているので参照されたい。その後、11月12日(月)～16日(金)にプロヴディフに於いてユネスコヴェニス事務所、ブルガリア・日本イコモスジョイントワーキンググループ、プロヴディフ市・Ancient Plovdiv Municipal Instituteのメンバーによる最終会議が行なわれたので報告する。

12日に全体会議議題について確認を事前に石井主査が送付されていた提案通りとする確認を行ない、13日から修復現場の現地視察の後、会議を行なった。

① 修復工事

B-B Ensembleは、修復状況の確認及び検討を行ない、12月にはすべて完成すると考えられる。

Klianty Houseは、軸部の修理進行中の段階で、12月中に内部まで完成することは困難である。このため、ユネスコの事業に引き続き、2008年にブルガリア文化庁・プロヴディフ市によって内装、壁画などを完成させることが確認された。

その他、Georgiadi、Nedkovich、Hindlyan、Nishanyan、Stambolyanについてはすでに終了している。

② トレーニング

University College High schoolの生徒に対し、美術修復、建築修復の訓練を、夏休み2ヶ月ずつ、2か年にわたって行なった。日本イコモスからは、講師として麓委員が参加し、日本における文化財修理の紹介や実測調査の実習を行なった。

③ 事業報告書

今後4年間にわたる事業の報告書を作成する必要がある。その分担とスケジュールについて検討した。主にブルガリアイコモスと日本イコモスのジョイントワーキンググループメンバーが執筆・編集を分担して行なうが、その分担の確認を行なった。

2008年1月15日原稿締め切り(ブルガリアイコモス)、2月1日校正案を日本イコモスに送付、2月15日第2回校正案をブルガリアイコモスに返し、3月末に終了するスケジュールである。

④ ジョイントワーキンググループの費用

現在ジョイントワーキンググループの費用はユネスコからブルガリアイコモスに送金され、ブルガリアイコモス事務局が管理している。主に両国ジョイントワーキンググループの現地会議の経費として使用され、他の経費はブルガリアイコモスが使用しているが、最終の経費の仕分けについて調整した。

⑤ その他

日本政府の文化無償援助により予定されている機材供与について、プロヴディフ旧市街の世界遺産の登録に向けての活動について話し合った。

(文責：矢野和之)

鞆の浦の問題：第6小委員会(主査：益田兼房)

今年4月理事会で、2004年から活動してきたそれまでの「文化遺産と都市開発の課題検討小委員会」から、広島県福山市鞆の浦の保存問題を専念して扱う、第6小委員会（鞆ノ浦の問題に関する研究）に名称を変更して、活動を継続的に行なっている。

ご承知のように、「鞆の浦」の国際的な文化遺産としての高い価値への認識とその保全については、すでにイコモスの国際的な会合の場で3回にわたり、日本政府・広島県・福山市に対して要望書や勧告が発せられており、日本イコモス国内委員会に対してもそれらの実現のため積極的な活動を行なうよう、要請がなされている。すなわち、2004年愛媛県松山市で開催のCIAV（イコモス民家町並みISC）勧告、2005年中国西安で開催の国際イコモス総会勧告、2006年広島県広島市で開催のイコモス法律行政財政国際専門分科委員会勧告である。従来から第6小委員会としては、国交省・文化庁・関係の国会議員・広島県の関係各局・福山市長等に、この趣旨を伝えて継続的に保存の要望を行ってきた。

しかし、2007年3月には、広島県は事業化のための測量や国の公有水面埋立認可に必要な手続きに踏み切ったため、万策尽きた地元鞆の浦の住民たちは「鞆の世界遺産実現と活力あるまちづくりをめざす住民の会」を組織し、港湾埋立免許をする広島県を被告として免許の差し止めを求める行政訴訟を4月に開始し、11月までに2回の公判が広島地裁で行なわれるに至った。この住民の会を支援する会も全国的な広がり組織されており、文化遺産の保護をめぐる大きな関心を社会的におこしつつある。

一方、県と市が3月の合同住民説明会で配布した「鞆地区道路港湾整備事業～期待される整備効果～」なる冊子の内容には、文化遺産の価値や保全に関わる不正確な情報が多く含まれていることが判明した。これは、いわばそれまでのイコモスとしての見解や評価を否定する公式文書であるため、これに対する正確な反論を行なうことが必要と考えられた。このため、イコモス第6小委員会として、関連する多方面の専門家のご協力をいただき、「歴史的港湾都市鞆の浦文化遺産保全に関する調査研究部会」を構成して、それぞれの客観的学術的な立場からの調査研究に基づき、各分野の報告をとりまとめて、8月に第1次、11月に第2次、そし

て12月に第3次の報告書を作成することとした。

この研究報告は、文化遺産の宝庫とも言うべき歴史的港湾都市「鞆の浦」の保全のために広く資することを願って公開され、日本イコモス国内委員会のホームページの小委員会活動報告に掲載され、また関係各方面への配布等を行なっている。現在、鞆の住民の行なう訴訟文書に原告側の資料として活用されており、また県側の反論も訴訟文書の中に表れているため、これへの必要な対応を研究報告の作成を通じて行なっているところである。第6小委員会としては、文化遺産保護に関わる専門家組織として、今後も継続的に客観的学術的な立場からの活動を行なっていく必要があると考えられる。（益田兼房）

白川郷・五箇山地区交通問題等：第7小委員会（主査：西村幸夫）

白川村では2007年度に観光車両の進入を制限する実験的な日を18日、一方通行を推進する日を3日、設定し交通対策を推進してきました。しかし、140万人を超す来訪者の激増には対応できていない現状です。さらに地区内駐車場の増加、日本風景街道「世界遺産合掌街道」に対する取り組み、2008年3月に予定されている東海北陸自動車道の全通によるさらなる交通集中が懸念されています。これに対応するため第7小委員会が結成され、交通の専門家を中心に主として白川村と折衝してきました。

その結果、これまで伝統的建造物群保存地区審議会で議論されてきた内容や2003年3月にまとめられた白川村まちづくり検討委員会報告書における議論との整合性を取る意味からも、議論のメンバーを第7小委員会の委員に限定するのではなく、これまで議論に参加してこられた他分野の学識経験者も加えて、新たな世界遺産白川郷マスタープラン作成のための検討会議が発足することとなりました。ここには第7小委員会から久保田尚氏、と西村幸夫が参加しているほか、佐々木政雄氏と日本交通計画協会の萩原岳氏も議論に加わっています。

この委員会では、伝統的建造物群保存地区内にとどまらず、広い地域を対象としたマスタープランを議論し、そのなかで交通問題を解いていくことを目指しています。現在は、委員会のメンバーである九大の西山徳明教授が問題提起を行



なう作業を進めているところです。(西村幸夫)

文化遺産のバッファゾーン：第8小委員会（主査：崎谷康文）

小委員会の設置と主査については、決定しましたが、参加メンバーや活動の仕方等については、未定のままになっています。(崎谷康文)

6. その他

■新設小委員会の報告

● 鞆の浦の問題：第6小委員会（主査：益田兼房）

「文化遺産と都市開発問題：第6小委員会」を鞆の浦問題に特化した。(2007年第1回理事会承認)

● 白川郷・五箇山地区交通問題等：第7小委員会（主査：西村幸夫）

新設小委員会（2007年第1回理事会承認）

● 文化遺産のバッファゾーン：第8小委員会（主査：崎谷康文）

新設小委員会（2007年第1回理事会承認）

● 朝鮮通信使の道に関する小委員会：第9小委員会（主査：三宅理一）

新設小委員会（2007年第4回理事会承認）

● 飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群の保存と景観環境の造成に関する研究班：第10小委員会（主査：佐々波秀彦）

新設小委員会（2007年第4回理事会において継続審議となった）

■ケベック第16回ICOMOS General Assembly（総会）について

役員選挙：岡田保良氏推挙

名誉会員推挙：坪井清足氏推薦

ケベック大会シンポジウムの日程

大会日程の概要とシンポジウムについては本誌20ページ参照。

■足達富士夫基金について

本誌4ページ参照。

■ ICOMOS Charter on Interpretation and Presentation 関係事例の紹介依頼

ICIP委員長のSilberman氏から、ICOMOS Ename Charterの進捗に関してメールが届きました。10月のICOMOS Advisory CommitteeでScientific CouncilおよびAdvisory Committeeで満場一致で可決され、来年秋のケベックでの大会に提出されることになったということです。憲章が採択されるよう、国内委員会委員長にご協力頂きたいということですので、よろしくお願ひ致します。また、本憲章をもとに図解の憲章を作成するために、インタープリテーションの成功例をぜひ推薦してくださいということですので、国内委員会委員の皆様にご案内頂ければありがたく存じます。(門林 理恵子)

(本誌3ページに関連記事)

審議事項

1. 新入会員および退会者の承認

新規入会者 2007年1月27日～2007年12月8日

個人会員

第1回臨時理事会（2007年1月27日）承認

氏名	所属	専門分野	推薦者
山田 宏 (やまだ ひろし)	奈良県教育委員会 文化財保存事務所 主査	文化財保存修 景技師、修士	前野まさる・金井健

第1回拡大理事会（2007年3月18日）承認

氏名	所属	専門分野	推薦者
江田修司 (えだ しゅうじ)	株式会社 江田福集 金画室 代表取締役	町並み保存	前野まさる・矢野和之
堀 繁 (ほり しげる)	東京大学 アジア生物 資源環境研究セン ター 教授	景観工学・地域 計画・空間デザ イン、建築	杉尾伸太郎・杉尾邦江
鉄矢悦朗 (てつや えつろう)	東京学芸大学 学術スポーツ科学系 美術講座 准教授	建築設計・ デザイン教育、 修士（美術）	前野まさる・金井 健
北川 卓 (きたがわ たく)	フレームデザイン株式 会社 代表取締役	建築設計、文化 財保存学修士	前野まさる・金井 健
三浦恵子 (みうら けいこ)	早稲田大学 文学学術院 非常勤講師	人類学・遺産学・ 東南アジア地域 学	稲葉信子・矢野和之

岡田宣之 (おかだ よしゆき)	金沢市 歴史遺産保存部 部長	一般行政職	矢野和之・西村幸夫
埜 正浩 (らち まさひろ)	株式会社 日本海コンサルタン 取締役 計画本部長	都市及び地域計 画、博士(工学)	矢野和之・西村幸夫
張 大石 (チャン・テソク)	東北芸術工科大学 文化財保存修景研究 センター 准教授	文化財保存学・ 保存科学、博士	田中哲雄・矢野和之
恒川久美子 (つねかわ くみこ)	国際航業株式会社 文化事業部 企画担当 営業課長	考古学・遺跡保 存活用整備計画	矢野和之・高木浩志

第2回拡大理事会(2007年5月18日)承認

氏名	所属	専門分野	推薦者
窪田亜矢 (くぼた あや)	工学院大学 建築都市デザイン学 科 准教授	都市デザイン、 工学博士	西村幸夫・矢野和之
佐々木真理子 (ささき まりこ)	東京エトラベル・ホ テル専門学校 観光経営学科 講師	観光教育・ 観光まちづくり	矢野和之・益田兼房
古川 洋 (ふるかわ ひろし)	有限会社 安芸構造 計画事務所 代表取締役	建築(構造)、 工学修士	柳澤孝次・山田利行
小林正美 (こばやし まさみ)	明治大学教授	建築設計、 都市デザイン	鈴木伸治・西村幸夫
石川慎治 (いしかわ しのじ)	滋賀県立大学 人間文化学部 助教	建築史・保存修 景計画学、 博士(工学)	益田兼房・濱崎一志
鈴木 環 (すずき たまき)	慶応義塾大学 政策・メディア研究科 博士課程	建築史・考古学・ 遺産学(政策メ ディア・環境デザ イン修士)	三宅理一・岡田保良
西野哲史 (にし の てつじ)	TBSテレビ報道局 報道番組センター プロデューサー	マスコミュニケー ション	日高健一郎・辻村國弘
OSORIO UGARTE Katti (オソリオ・ウガルテ・カティ)	筑波大学大学院 人間総合科学研究科 世界遺産専攻 博士課程後期	建築、 修士(文化財)	前野まさる・矢野和之
尾崎 信 (おさき しん)	株式会社 アトリエ74 研究員	都市計画・ 景観、工学修士	佐々木政雄・矢野和之
佐藤宏之 (さとう ひろゆき)	東京大学大学院 人文社会系研究科 教授	考古学、 文学博士	小野 昭・矢野和之

第3回拡大理事会(2007年9月22日)承認

氏名	所属	専門分野	推薦者
金山秋煥 (かなやま あきのり)	東急電鉄(株) 情報コミュニケーション 事業部 課長	都市計画、 工学博士	矢野和之・松田正充
柴田 久 (しばた ひさし)	福岡大学 工学部社会デザイン 工学科 准教授	まちづくり、景観 設計、計画、環 境政策、博士 (工学)	高尾忠志・福島綾子

久保田利恵子 (くぼた りえこ)	独立行政法人 国際協力機構	経済学士	益田兼房・矢野和之
篠原 琢 (しのはら たく)	東京外国語大学 国語学部 准教授	ハブスブルク帝 国史、 プラハ市史	矢野和之・益田兼房

第4回拡大理事会(2007年12月8日)承認

氏名	所属	専門分野	推薦者
岩本健吾 (いわもと けんご)	文部科学省大臣官房 文教施設企画部 施設助成課長	文化財行政・ 世界遺産学	前野まさる・矢野和之
小野寺英輝 (おのでら ひでき)	岩手大学 工学部 准教授	技術社会史・ 工学史、 工学博士	前野まさる・矢野和之
毛利和雄 (もうり かずお)	日本放送協会 解説委員室 解説委員	ジャーナリスト (文化遺産)	前野まさる・益田兼房
趙 賢貞 (ソ・ヒョンジョン)	東京芸術大学 文化財保存学専攻 保存修復建造物研究室 博士課程後期	建造物保存、 工学修士	秋枝ユミイザベル・ メンドサ高田オルガ恵子
徐 旺佑 (ソウ・ワンウ)	東京芸術大学 文化財保存学専攻 保存修復建造物研究室 博士課程後期	史蹟整備、 工学修士	清水真一・ 秋枝ユミイザベル
西岡 聡 (にしおか さとし)	(財)文化財建造物保 存技術協会 事業部修復設計課 技術職員	文化財建造物の 修復、工学修士	斎藤英俊・花里利一
富永善啓 (とみなが よしあき)	(財)文化財建造物保 存技術協会 事業部修復設計課 技術職員	文化財建造物の 構造検討及び補 強、工学修士	斎藤英俊・花里利一
岡橋純子 (おかはし じゅんこ)	ユネスコ本部 世界遺産センター 事業専門家	文化政策論・ 歴史的都市保 全政策	西村幸夫・稲葉信子
備瀬ヒロ子 (びせ ひろこ)	(財)都市科学政策研究 所	地域計画・景観 技術士	矢野和之・益田兼房
桑原佐知子 (くわはら さちこ)	地球環境パートナー シッププラザ	歴史的環境保 全・都市地域計 画修士	前野まさる・ 秋枝ユミイザベル
内藤 廣 (ないとう ひろし)	東京大学大学院 工学系研究科 基礎学専攻 教授	建築設計・景観 設計、工学修 士、一級建築士	前野まさる・矢野和之
柳沢礼子 (やなぎさわ あやこ)	(財)文化財保存計画協 会 研究員	建造物修復設 計	矢野和之・友田正彦

維持会員(国内) なし

退会者

一般会員

氏名	専門	理由
岡村道雄	考古学	一身上の都合により



村上 詔一	日本建築史	一身上の都合により
河原 純之	考古学	一身上の都合により

維持会員

社名	理由
総合計画機構	都合により

日本イコモス国内委員会 会員数 (2007.12.08)
個人会員 322 + 12 - 1 = 333 名 維持会員 14 - 1 = 13 社

2. 2008 年次活動方針

会員担当: 会員、維持会員 (杉尾伸太郎、田辺征夫理事)
継続して、個人会員、維持会員の増加を図る。

事業担当 (西浦忠輝、西村幸夫、清水真一理事)

① 研究会、講演会等を可能な限り多く開催する。この場合、本委員会の会員数、予算的制約等に鑑み、他機関、団体等との共催を積極的に行なう。

② 2008 年 9 月にカナダのケベック市で開催予定の第 16 回 ICOMOS 総会・シンポジウムにできるだけ多くの参加者、特に研究発表者を送り込むために必要なサポートを行なう。その具体的内容は下記の通りである。

- 会員に総会・シンポジウムの内容、スケジュールを知らせ (インフォメーション誌、ホームページ)、研究発表を呼びかける。逐次情報を更新する。
- 研究発表についての相談 (テーマの適応性、英文の書き方、海外渡航に関する事項等々) に応じる。
- 研究発表申し込みや、プレプリント用原稿作成についてのサポートを行なう。
- カナダ渡航についての情報の提供や相談に応じる。
- 発表時における質疑応答に対するサポート (通訳等) を行なう。

③ 日本イコモス国内委員会としての研究発表大会 (学会の年次大会に相当) の開催に向けての具体的な検討を行なう。 (西浦忠輝)

渉外担当 (西村幸夫理事)

2008 年度においても、海外からの来客があった場合には

積極的に日本イコモスとしての接遇の機会を作りたいと思います。また、各 ISC 関連以外の情報で、一般のイコモス会員が個人的に関与することになる海外関連の情報 (たとえば、世界遺産関連の evaluation mission の依頼、reactive monitoring の依頼、ユネスコやイコモスが主催する国際会議等への個人の資格での招聘や参加など) に関しても、情報を交換する場を設けて、日本イコモス会員相互の連絡を密にしたいと思います。 (西村幸夫)

広報担当 (赤坂 信、黒田乃生、濱崎一志理事)

広報担当の理事は赤坂を含め黒田、濱崎の 3 名ですが、今後も相互に連携をとりながら作業を進めたいと考えています。ホームページは第一歩を踏み出したところですが、広報としてホームページ全体を見ておく必要があります。これは黒田理事が担当しますが、日本では人間的にもすぐには無理ですが、「ICOMOS 本部のホームページにある Documentation Centre の日本版のようなもの立ち上げ」の可能性を先ず検討することが当面の目標です。濱崎理事は諸会議の記録とさらに踏み込んだ取材機能を取り入れた広報活動を担当し、日本イコモスの機関誌 INFORMATION とホームページの記事内容の充実を目指します。 (赤坂 信)

ホームページについて

- リンク集の追加
- 英語ページの開設
- 会員専用ログインページの開設と活用方法の検討
- ICOMOS 本部のホームページにある Documentation Centre の日本版のようなもの立ち上げの検討

(黒田乃生)

3. 各国際学術委員会 (ISC) 及び小委員会 活動方針

(1) ICOMOS 国際学術委員会 (ISC)

Analysis and Restoration (ISCARSAH 建築遺産構造解析: 花里利一、坂本 功、西澤英和)

国際学術委員会は 6 月に英国・バース、9 月にはイコモス総会に合せてカナダ・ケベックで委員会が予定されている。活動は、引き続き、ISCARSAH が策定した建築遺産の構造修復と解析に関するガイドラインの見直しと普及、及び

ISO13822の改訂に関わる活動が行なわれる。とくに、ISO13822の改訂では、改定案であるANNEXの骨子が固まりつつあり、2008年は国際的合意に向けての活動が期待される。国内においてもISO/TC/98/SC2/WG6国内対応作業部会が主体で草案を作成しており、ISCARSAHと連携しつつ、改訂に向けての活動が続けられる。

なお、私見であるが、文化財建造物の耐震診断・補強指針の国際的動向について、各国の規準類の現状と課題を把握する必要があると考えている。2006年には新たにイタリアで規準が示されるなどの動きもあり、今後、ISCARSAHでは各国の規準類を収集し、情報を共有する活動も期待される。そのなかで、日本の耐震診断指針（文化庁2001年）を、ISCARSAHを通して国際的に発信する活動も行ないたいと思う。（花里利一）

Historic Towns and Villages (CIVVIH 歴史的町並み集落：福川裕一、上野邦一)

2007年取り上げたテーマはしばらく尾を引きそう。来年はケベックが会場。（福川裕一）

Underwater Cultural Heritage (ICUCH 水中文化遺産：荒木伸介)

来年度Québecで開催されるICOMOS総会に向けての提案内容、活動方針などは来春4月までに纏められる予定とのことである。

幸い、この12月15日にNPO法人アジア水中考古学研究所(ARIUA)とオーストラリア海事考古学会(AIMA)共催の「海事考古学に関する共同セミナー」が福岡市文学館会議室で開催され、これにDavid Nutley氏が来日し講演されるので、この機会にまた話をお聞きしたいと思っている。（荒木伸介）

Cultural Landscapes ICOMOS-IFLA (文化的景観国際学術委員会イコモス・イフラ：杉尾伸太郎、本中 眞)

今後の会合の予定（詳細未定）は以下の通り。

●2008年4月後半：ノルウェー（オスロ） 文化的景観に関する世界遺産現地調査技術指針作成作業にむけたワーキング会合

●2008年9月29日：カナダ（ケベック） ICOMOS総会にあわせて年次会合を開催する。あわせて、その前後でアメリカ・ヴァーモント州においてワーキング会合・セミナー等を行なう（アメリカからの委員の強い要望による）

●2009年6月頃：日本において年次会合を開催する。

●2009年中：フランスにおいてセミナーを開催

●2010年：イランにおいて年次会合を開催

（杉尾伸太郎）

Earthen Architecture (土の建築：岡田保良)

2008年2月初旬、マリのバマコで開催されるTerra 2008の場で、初会合の見込み。当面は「土の建築」保存のガイドライン策定を軸とし、同時に5分野（in use/ archaeology/ technology/ landscapes/ seismic）ごとに行動方針が模索されることになると思われる。（岡田保良）

Legal, Administrative and Financial Issues (ICLAFI 法律・行政・財政問題：河野俊行)

2008年はフィンランドで、2009年はコロンビアで開催する方向で調整が進んでいる。（河野俊行）

Heritage Documentation

(CIPA 写真測量文献：山田 修)

「第2回 文化遺産のデジタルドキュメンテーションと活用に関するワークショップ」を来春に奈良文化財研究所で開催予定。発表候補者をリストアップ済み。2009年のCIPA京都につなげる。（山田 修）

Cultural Routes (CIIC 文化の道：杉尾邦江、大野 渉)

2009年にCIICのミーティングとカルチュラルルートに関連する国際シンポジウムを日本で開催する事について検討する。（杉尾邦江）

Stone (ISCS 石質遺産：西浦忠輝、石崎武志)

ケベックでのICOMOS総会・シンポジウム、トールンでのSTONE 2008シンポジウムの折に、委員会が開催される予定である。日本の委員は少なくともICOMOS総会・シンポジウムには参加する予定である。ISCSへの参加者を増やすべ



く、「石の保存」国内連絡会を組織していく予定である。

(西浦忠輝)

Risk Preparedness (ICORP 防災：益田兼房)

国際分科会の活動計画については、現時点では何も情報を得ていない。カナダ・ケベックでの総会で正式分科会となれるよう、努力したい。日本国内では、継続して立命館大学ユネスコチャ文化遺産危機管理国際研修を、イコモス(ICORP) 後援事業として行なう予定である。なお、関連して、ユネスコアジア文化センター奈良事務所が奈良市で主催する、文化遺産防災国際会議は、昨年度に続いて2008年1月16日～19日(会議本体は17/18日)に開催が決まっており、日本イコモスが後援するよう要請がされている。

(益田兼房)

Rock Art (CAR 岩面画：小川 勝・五十嵐ジャンヌ)

委員会メンバーによる国内岩面画遺跡群(鹿児島県徳之島を予定)の総合調査。

(五十嵐ジャンヌ)

(2) 小委員会

憲章小委員会：第1小委員会(主査：藤井恵介)

- 来年は、もともと計画しているように、憲章に関して、数人の方々に、インタビューを実施する。
- 憲章のあり方について、検討を重ねることしたい。

(藤井恵介)

プロヴェディフ旧市街保存事業協力班：第5小委員会(主査：石井 昭)

ユネスコの事業は終了するが、Klianty Houseの工事が残っていること、事業報告書の出版・刊行を行なうことなどにより、2008年度も継続して活動する。(文責：矢野和之)

文化遺産と都市開発の課題検討小委員会：第6小委員会(主査：益田兼房)

「鞆の浦」の港湾埋立事業の認可の手続きは進行中であり、早ければ2月に国交省港湾局の認可があり、3月には県の埋立免許、4月から着工という行程が予想される。訴訟では、免許の仮差し止め等も追加することが検討されている

が、予断は許されない状況である。第6小委員会の活動としては、研究報告の作成以外にも一般社会の理解を深める広報的な研究会の開催などを検討し、国際社会からの期待を裏切らないように、イコモス本部とも連携を取りつつ、慎重かつ積極的継続的に対処をしていきたい。(益田兼房)

白川郷・五箇山地区交通問題等：第7小委員会(主査：西村幸夫)

2007年の活動を引き継ぎ、当面は世界遺産白川郷マスタープラン作成のための検討会議に積極的に参加し、交通問題の解決へ向けた提言を行なっていきたいと考えています。将来的にはモニタリングへ向けた日本イコモス独自の自主モニタリングを行なうことも視野に入れていますが、やや先の課題になると思われます。(西村幸夫)

文化遺産のバッファゾーン：第8小委員会(主査：崎谷康文)

メンバーを固めることと、どのような内容の活動をすべきかについて、引き続き理事会のご指示を受け、会員の皆様のご意見を踏まえ、できる限り速やかに進めていく必要があると考えます。(崎谷康文)

4. 2008年次予算案(2007年12月1日から2008年11月30日まで)

以下の予算案が提出され、了承された。

1. 収入

2008年分会員会費	3,280,000円
未納分会員会費	490,000円
維持会員会費	1,000,000円
事業費等収入	0円
雑収入	0円
寄付金	150,000円
普通預金利息	2,000円
定期預金利息	29,000円

合 計 4,951,000円

2. 支 出

ICOMOS 本部負担金 (40 ユーロ×333 名)	2,197,800 円
会議費	400,000 円
研究費	100,000 円
渡航費補助	0 円
INFORMATION 誌 編集・印刷費	900,000 円
通信費	500,000 円
事務用品費	80,000 円
事務局人件費 (交通費を含む)	750,000 円
事業費	0 円

合 計 4,927,800 円

3. 収 支 (収入-支出) 23,200 円

協議事項

1. 日本国内の世界遺産関連機関と日本イコモス国内委員会との協議について

上記の件でパリの本部から意見を述べるように要請されたが、日本イコモス国内委員会としては、世界遺産の関連資料が来ないことには、返答のしようがない。これが改善されなければ、パリ本部からの要請には応えることができないのは明白である。世界遺産申請は国が最終的に行なうものである。すなわち、政府が推薦して世界遺産が決まるまでのプロセスがある。登録まで見守りながら適正な意見をいうことが日本イコモス国内委員会の立場である。以上のことが討議された。

2. ケベック第16回イコモス総会について

2008年 ICOMOS ケベック総会のプログラム

16th General Assembly and International Scientific Symposium

“THE SPIRIT OF PLACE – BETWEEN INTANGIBLE AND THE TANGIBLE”

September 29th to 4th October 2008

International Forum of Young Researchers and Professionals in Cultural Heritage 27-28/09/2008

International Scientific Committees' Day 29/09/2008

Opening Lectures 30/09/2008

Scientific Symposium 01-03/10/2008

16th General Assembly 04/10/2008

Post Conference Tours 05/10/2008

詳細は以下をご覧ください。

http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/01_bienvenue.htm

http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/06_programme.htm

シンポジウムについて

アブストラクト応募期限：2008年3月1日（オンライン応募で所定フォーム使用、ファクス不可）すでに締め切られました。アブストラクト審査結果（口頭発表・ポスター）通知：2008年4月

フルペーパー締め切り：2008年7月15日

アブストラクト：100～150ワード（英語もしくは仏語）

応募情報：執筆者氏名、連絡先、サブテーマ、キーワード、略歴（75ワード）

詳細は以下をご覧ください。

テーマ：<http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/pdf/Appel-then.pdf>

応募（アブストラクト、フルペーパー）詳細：

http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/05_appelconferences2.htm

3. 公益法人化について

本誌4ページ参照。

研究討論会：

The Spirit of Place—Between the intangible and the tangible —

(ICOMOS 16th General Assembly—Québec 2008のテーマから)



日本イコモス国内委員会2007年次総会の終了後、15時30分から17時30分まで東京都庭園美術館新館大ホール（東京都港区白金台）で上記のテーマで研究討論会が開催された。

コーディネーターは西浦忠輝理事。発表者と標題は以下の通り。

研究発表（15：30～16：30）

- 前野まさる氏：Pride of placeからthe spirit of placeまでの経緯
- 山口博之氏（山形県教育庁 教育やまがた振興課世界遺産推進室 企画調査主査）（外部参加）：「最上川の文化的景観」一場の精神性への試論一
- 桑原佐知子氏：東京の歴史的環境保全計画の代替手法：市民主導のまちづくりによる無形文化の保全
- 益田兼房氏：沖縄のうたきにおける文化的空間と沖縄宣言（2004）
- 赤坂 信氏：有形と無形の間 — 「眺望遺産」の提唱の意味—

（以下、紙上参加、事務局代読）

- 土本俊和氏：善光寺という場所の精神
- 下仲隆浩氏（小浜市総合政策部 世界遺産推進室 文化遺産政策専門員）（外部参加）：若狭小浜における神仏習合を示す寺社の立地環境

質疑および討論（17：00～17：45）

本年秋に開催されるイコモス総会のシンポジウムでは「場の精神 有形と無形の間」がシンポジウムのテーマとなっているが、そのテーマの解題と関連の事例研究が報告され、質疑応答の後、活発な討論となった。

日本の文化財保護とアメリカの歴史保存

金井 健（奈良文化財研究所）

2007年7月から4ヶ月間、フルブライト奨学金を得てアメリカの歴史的建造物保存の理念と実践についての現地調査を行いました。日頃、日本の歴史的建造物の保存に関わる中で、国宝を頂点とした文化財としての保存と、古い建物のリノベーションといった普通の建物としての保存との間の隔たりが年々大きくなっているように感じられます。果たして良くも悪くも戦後の日本社会のモデルとなってきたアメリカ社会ではどのように歴史的建造物の保存が行なわれているのだろうか？そうした疑問が調査をする動機となりました。アメリカではワシントンDCの中心部に事務局を構えるUS/ICOMOSに籍を置いて活動をすることができ、調査の実施に際して多大な協力を得るとともに、イコモスが文化遺産保護の分野において果たしている役割の大きさと国際的なネットワークをあらためて体感することができました。

調査の結果まずわかったことは、日本の文化財という考え方が意外にもアメリカの影響を強く受けていることです。アメリカの国立公文書館には日本を占領統治したGHQの行政資料も収められていますが、その中のCIE（民間情報教育局）の関連資料に文化財保護法の制定に関するものもみられます。これらの資料からは、歴史資料をランク付けして貴重なものを重点的に保護するという文化財の根幹をなす考え方が、文化政策では国家の関与を限定させるアメリカの考え



写真1) US/ICOMOS事務局が入るナショナルビルディングミュージアム

方を強く反映していることがわかりました。また文化財という言葉についても戦前には一般的ではなかったことが広く知られていますが、この言葉自体が文化財保護法をつくる際に、その指導にあっていたCIEの宗教・文化財課 (Religion & Cultural Resource Division) から引用したものだと思われる。

一方、現在のアメリカでは建物や遺跡など土地に根差した文化財と工芸品や遺物など保管が可能な文化財が法的にも分野としても明確に区別されていて、前者が歴史保存 (Historic Preservation) と呼ばれています。その根拠となる歴史保存法は第二次世界大戦後の急速な都市再開発や道路網の整備によって多くの歴史的建造物や遺跡、景観が失われていくことを憂慮した関係者の働きかけによって1966年に起草されました。その大きな特徴は歴史保存の考え方を、それまで日本と同じように国家的重要性が高く貴重なものを重点的に保護の対象としていたものから、公共の福祉にあたるものとして現代社会の活動の中で普遍的に保護の対象とするものに転換した点にあります。歴史保存を社会の一部として行なっていくとする場合、やはり最大の課題は、歴史保存の対象物が歴史的な価値のみならず、それらを資産として持つ所有者にとっての価値や環境として享受する人々にとっての価値など社会的に多角的な価値を有していることであって、その活用方法は一概に規定できるものではなく歴史保存の関係者にとって頭のいたい問題のようです。

そうした中でどのように歴史保存の活用が行なわれているかといえば、活用に対する関係者の様々な主張を踏まえた妥協策をさぐることが最も重視されていて、行政に設置された歴史保存の評議会などでそうした議論が日常的に行なわれています。したがって市中にみられる保存活用の事例は、内部も含めて歴史的な価値が丁寧に保存したものから外部をおごなりに保存しただけのものまで実に様々で、アメリカでも賛否両論のあるところですが、しかし、いずれにしても歴史保存が関与する事業が相当な量であることは確かで、行政や非営利団体のみならず都市開発ディベロッパーや設計事務所などを含め、歴史保存が社会広範に広がる業界のひとつとして成立していることは注目に値するでしょう。こうした状況は、歴史保存の分野がそれらの保存活用において、歴史的価値の保存に軸を置きながらも、それらが有する世俗的な価値の調整をはかる責任者として能動的に関与していくことで成立して

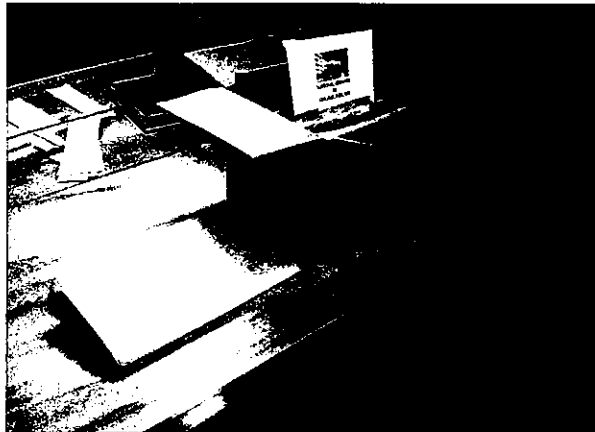


写真2) 国立公文書館に収められているCIE関連資料の一部



写真3) 住宅開発が進められる歴史保存地区 (フォレスト・グレン)

いるといえそうです。

米国の歴史保存の発展は日本の文化財行政の発展と似たところがありますが違いも大きく、日米の現代社会をみる上で興味深いものがありました。また歴史保存という考え方には、奇しくも奈良において進行中である特別史跡平城宮跡の国営公園化の発想と相通じるものがあり、日本の文化財分野が早急に検討すべき課題を含んでいるように強く感じています。



ソウル崇礼門（南大門）放火焼失事件に関する緊急報告

李 明善（立命館大学歴史都市防災研究センター）

2月10日、夕方9時から深夜にかけて、韓国ソウル市の、南大門の名称で知られている崇礼門（国宝1号、1398年創建、1479年大補修）が放火によって5時間も燃え続け、焼失する事態がおきた。

2月11日朝、京都で第一報を聞いたときには、なにかの間違いだと思ったが、ネットでみた衝撃的な写真は、この深刻さをもの語っていた。急いで、ソウルへ向かった。ここでは、崇礼門焼失現場の様子とそこで感じたことを緊急報告する。

12日午前8時、崇礼門焼失現場に到着した。崇礼門は、ソウル駅、市庁、南大門市場に歩いていける、まさにソウル市の中心部に位置しており、現場では市民への影響に配慮したのか、15mの柵を取り付ける作業が始まっていた。現場内部の出入りは制限されていて、外でしか見ることができない状況であった。外で見た限りでは、特に1階の木材の損失が思ったほどひどくなく、国宝指定解除の最悪のケースは免れそうな、不幸中の幸いというのが、率直な感じだった。また、2階の高柱の一部が残っていたり、窓の一部が残っていたり、方向によっては2階もわずかであるが、一部残っていた。捕まった放火犯（2006年にも昌慶宮の明政殿に放火した犯罪歴があるそう）の陳述によると、崇礼門正面からみて2階右側にまいたシンナーにライターで火をつけ、火を放ったとされる。屋根の焼け跡、残存部材を見ても、まさに火が右側から左側に、しかも少し上昇しながら小屋組みに移動していたようにみえた。

午後は、明知大学韓国建築文化研究所の金王植先生と現場で合流した。現場内部に入って焼失状況や残存部材などを確認したかったが、ソウル市文化財委員会の委員である金先生でさえも出入り禁止の状況であった。中では、文化財庁、ソウル市、消防防災庁、警察が、合同で現場検証を行なっていて、外では、多くの市民が集まり、この悲惨な状況を悲しんでいた。また、市民団体などのちょっとした揉め事も

あるなど、現場は緊張した雰囲気であった。現場で遭遇したソウル市文化財担当の方の話によると、合同現場検証が終わり次第、文化財の専門家たちによる本格的な調査を行なう予定だそうだ。

報道されているように、消火栓と自動火災感知設備が全く無く、文化財庁と消防防災庁の連携ができなかったことなどが、このような状況をつくってしまった、最も大きな原因だと思われる。しかし、現場で、金先生と話して分かったことは、崇礼門の特殊な小屋組み構造に対する理解の不足が初期消火に失敗した一つの原因ではないかということだ。これは、屋根の加重を軽減し、高さを維持しながら屋根に盛り込む土の量を減らすため工夫された、小屋組みの木材を二重にかける構造が、一瞬、火災が鎮圧されたかのように見せてしまったと推測される。実際に、消防隊員が2階の内部に入り、確認したところでは炎が収まったように見えていたが、その後激しく燃え上がり、屋根が中央から崩れ落ちたという。消防側に、崇礼門の小屋組み構造の特性が伝わっていなかったのであろう。

このような、屋根の加重を軽減する方法は、金先生の話によれば、最近の韓国の文化財建造物の修理でよく用いられているようだ。つまり、今回の事件は崇礼門だけの特殊な問題ではないことが危惧される。

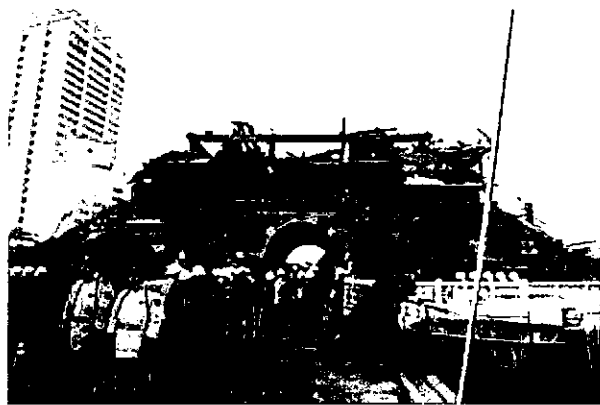
2008年旧正月の連休明け、韓国国民が目にあたりにしたのは、あまりにも衝撃的な場面であった。深夜のテレビで生中継され、屋根の崩れ落ちゆく様子を、心を痛めながらも、なにもできず、ただ燃え上がる炎を呆然と見ていたことは、怒りを通り越して国民を無気力な状態に陥れていると感じた。またこれは、歴史的な文化遺産がただの「モノ」ではなく、私達と一緒にこの時代を生きているものだ、皆が改めて実感した瞬間でもあったのであろう。

正直に言えば、崇礼門全焼のニュースを聞いて、ソウル行きの飛行機の中で、私は絶望的な気持ちで一杯だった。が、現場に行き、痛々しい姿ながらも建ち続けている崇礼門をみたときには、「よくも耐えてくれた」と、不思議にも希望が（少しずつではあるが）、芽生えてきた。

これからやるべきことは多くある。文化遺産の特性をよく理解した防災計画樹立、防火防犯を含んだ防災施設の拡充、消防側と文化遺産側の連携、日常的管理の強化などなど。

しかしながら、これを教訓として今後の文化遺産防災対策作りに活かせるとしても、今回の崇礼門放火焼失事件は、あまりにも痛々しい、厳しい現実であることは変わらない。

韓国は勿論のこと、日本のマスコミでも刺激的な写真や、コメントだけが飛び交う中で、いわゆる「魔女狩り」だけで、根本的本質を見落としてしまうのでは、と個人的に心配している。そうならないためにも、日本の災害についての豊かな(?) 経験が、これからの韓国には切実に必要かと思う。



警察、消防防災庁、文化財庁、ソウル市による合同現場検証が行なわれている。(崇礼門正面)



2階も一部の木材は焼失を免れている。(崇礼門正面左側)

以下は、上掲の李明善氏の報告に対するコメントとして益田兼房氏が書かれた書簡である。李氏が本誌に寄せた報告は、現地に直接おもむきその状況の詳細を伝えた、まさに時宜を得た内容であったが、これを受けて益田氏は日韓の防災に関する示唆に富む比較論や戦略論を展開している。今後、文化遺産と防災に関しておおいに参考となると判断し、ご両人の許可を得て、ここに掲載することにした。

(編集担当：赤坂 信)

《公開書簡》

ソウル南大門火災関連報告 —日本との比較—

ICORP (防災) 研修担当
益田兼房 (立命館大学)

李 明善様

ソウル南大門火災の調査とご報告、ありがとうございます。韓国の国宝第1号という文化財保護上の象徴的な存在での痛ましい事故に、心よりお悔やみ申し上げます。

今回の南大門の火災事故は、同じ木造建築文化圏の防災という観点から見て、いろいろ考えさせられました。日本としても、今後の管理や防災のシステムを改善する上で、いろいろ学ぶべき点がありそうです。今日2月16日は、沖縄の首里城の守礼門に来ていますが、木造なのに自動火災報知設備も消火栓設備も、まったくありません。琉球王国の城門として16世紀前半に創建され、昭和8年に国宝に指定されて修理された後に第二次大戦で焼失し、昭和33年米軍占領下で戦前の図面に基づいて県民の募金で沖縄県指定文化財として復元再建されたという歴史をもつこの建物は、南大門(崇礼門)とは比較にならない小さなものですが、国家として中国使節を迎える礼を重んじるメッセージをもち、地域の人々の文化的アイデンティティに深く関わる歴史的建造物である点で共通しています。

韓国で今後の方向が固まり、少し落ち着いたら、イクロム等も招いての国際的な会議をして、東アジア木造建築文化圏で今回の教訓を共有するような企画もあり得るのではないのでしょうか。各国が取り組んでいるグッド・プラクティスを発表する、というかたちも考えられます。もし政府間ではややデリケートな部分があるようなら、例えばですが、NGOとしてイコモスと立命館大学と明知大学の共同プロジェクトに、政府から専門家派遣という協力をいただく、という形態もあり得ましよう。1990年代のノルウェーの木造教会建築連続放火事件のあとの、日本も参加した文化遺産防災国際会議のことが思い出されます。

私としては、日本での文化財の火災事故と共通する、下記の諸点を考えてしまいました。



1. 屋根の二重構造の危険性が知られて居らず、いったん鎮火したと考えていたら、再度燃え上がって大事故になった、という火災の流れ自体は、日本の川崎民家園にある重文大田家住宅での茅葺き屋根火災事故などと全く同じで、興味深いです。茅はストローのなかに水が入りにくく再燃の危険性が高いので、一度火の入った茅屋根は壊すしかありません。いったん火勢が収まったら、屋根の茅材全体を地上に落として河原などに運んで全部焼く、という破壊消防が必要です。しかし全国的に茅屋根が無くなり、この消防技術が消防側でも伝承されて居ませんでした。バレーボールの時間差攻撃のように、消防は鎮火判断の裏をかかれたわけですが、文化財側もその危険を十分に知ってはいませんでした。

2. また屋根に消防車がいくら放水しても、瓦が水を防ぐために、屋根の内部構造で広がる火災を消せないで大事故になった、というのは、日本の桧皮（ひわだ）屋根で何度も起きている焼失事故と同じです。奈良県の重文樞原神宮の全焼指定解除事故の場合、桧皮葺きは消防の放水では壊れないくらい強いので、屋根内部に注水ができなかったのです。火災の早い段階なら、屋根面に消防士が立って、桧皮をめくって内部に注水する破壊消防作業が可能なのですが、小屋組内が燃えている段階になってしまうと、屋根上の消防士が燃える屋根の中に落下して死亡する可能性があり、消防隊長は危険で命令が出せません。

この事実がわかってから、国宝等の桧皮屋根の修理工事では、桧皮屋根の内側に向けて内部から放水できるスプリンクラーをあらかじめ設置する方法が始まっています。京都の国宝大報恩寺本堂や清水寺本堂、和歌山の国宝金剛峯寺不動堂などが、その例です。

3. 日本では、何度も放火による火災事故を経験した後、火災に弱い茅や桧皮の植物性屋根の火災について、消防研究所と文化庁が協力して科学研究費を取って実験をしたことがありました。屋根表面を上から面的に濡らすドレンチャー設備は明治時代から使われていて、表面への着火延焼を防止するには有効なのですが、表面から屋根材の内側に火が入り込むと、十分ではありません。桧皮屋根の場合、表面から着火して少したつと、火種がもぐさ状態の桧皮表面に小さな穴を作って、ほとんど煙を立てずに中に火種が潜って落ちてゆき、屋根の小屋組内部まで落ちてから大きく燃え広がるとい

うパターンで、時間差で発見が遅れて消火不可能となり、全焼して指定解除した経験がなんともあります。

京都の国宝清水寺本堂でも、昭和40年代に葺き替えた桧皮屋根表面のドレンチャー放水設備に加えて、最近の防災工事で屋根小屋組の内部がモニターカメラで見えるようにして、火災状態を確認して内部放水できる仕組みを追加しています。2月14日にお寺に聞いたところでは、今回の南大門火災事故の直後に、防火責任者は実際の消火活動を担う若者たちに屋根の内部を見せて、これらの装置が有効に働くことの確認をさせています。消防士も火災時の小屋組に入るのは煙に巻かれる危険性があり、所有者の寺側では間違っても内部放水弁を開けると大被害ですから、最終決断を下す前にこうした装置が有効なのです。

4. なお、縦割りになりやすい中央官庁レベルで消防と文化財がマスコミの前で責任をなすりつけあったのは、新しい大統領就任の時期に近いこともあり、結果的には政治家の出番を作り、制度改善が早期に可能になるのかもしれませんが。日本での両者の協調体制は、少しはましかもしれません。この数年の消防庁の作成する職員募集ポスターには、「文化遺産を火災から守るのは君だ」というメッセージで社寺や世界遺産を背景に描き、誇り高い職業として、一般の消防士を募集しています。日本の中央官庁レベルで消防と文化財が握手できているのは、法隆寺火災を忘れないために毎年1月26日を「文化財防火デー」として、消防が主役になって全国で共同活動できる機会があるおかげかもしれません。

地方公務員の場合には、組織横断的にキャリア形成されるので、自分の町のために組織をあげてがんばろう、という気分がつくりやすいです。とくに京都市の消防局予防課には文化財係があって、毎年秋の文化財防火週間に、京都府と京都市の消防と文化財の4者の職員が、河原町の交差点で文化財防火週間のティッシュペーパーを市民に配っているのは、市民だけでなく、国民がみてもほほえましく尊敬できます。しかし、これは全国的には例外的で、同じく世界遺産のある奈良県庁や奈良市でも実現していません。

日本では文化財の火災事故は、消防法で自動火災報知設備の設置義務があり、国庫補助等で初期消火用消火栓が約8割普及しているため、一般火災よりもはるかに発生率が低いのです。そのため、火災の原因は意図的な放火が半

分以上を占め、防犯体制と防火体制の両方が重要になっています。地震国日本の現時点での文化財防災の重要課題のひとつは、阪神大震災以降はつきりした、直下型大地震の後の同時多発する都市火災からの防御です。文化財周辺に広がる木造町並みは、地震倒壊後の長時間の大火災を起こし、現状の消防車がくるまでの数十分間の消火活動を前提にした貯水槽では、全く不十分です。都市計画としての木造町並み保全を前提とした、地震に強い自然流下型の大規模消火栓設備網の設置が、京都・奈良・金沢など全国の歴史都市のまちづくりとして必要になっています。

木造建築文化圏での防災、とくに火災対策の経験の共有という点では、フィリピンや台湾、モンゴルなども関心があるかと思われまます。ユネスコ北京事務所の歴史的建造物保存の担当の杜さんなどとも、ユネスコ・イコモスレベルで共同歩調が取れるような機会が作れそうか、相談してみたいと思います。まずは、貴重なご報告への御礼を申し上げます。

2008年2月16日

**ACCU 奈良主催の国際会議 「文化遺産の危機管理Ⅱ」
—自然災害への備えを考える—報告**

ICORP (防災) 益田兼房 (立命館大学)

日本イコモス国内委員会が後援して、昨年に引き続き ACCU 奈良 (ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所) 等が主催する、標記の国際会議が、2008年1月16日～19日に奈良県新公会堂などで開催された。コーディネーターを担当した立場から、この会議の準備運営にあたった多くの日本イコモス・メンバー、そしてオブザーバー参加いただいた多くのメンバーに、感謝申しあげます。特に前野まさる委員長には、討論会でも日本の歴史的地区でのコミュニティのもつ安全性などについてご発言いただくなど、会議を通じて国際交流親善に尽くしていただき、厚く御礼申し上げます。

今回の会議の成果は、最近アジアで多発する地震災害に関して、文化遺産の構造的な耐震対策はどうあるべきか、また周辺地域社会の復興の現状にたいして国際社会はなにが貢献できるか、などを検討し、その結論文書を採択できたことにある。

16日は京都の西本願寺や二条城の防災対策の見学、19日は奈良県民向けの公開討論会であったので、専門家の発表討論のあった17/18両日を中心に、以下概要を報告する。

会議の開催要項によれば、昨年 (2006) 度から実施する「文化遺産の危機管理」国際会議の第2回目にあたる。昨年はアジア・太平洋地域における文化遺産へのさまざまな危機を概観したが、2007年度からは3年をかけて自然災害による最近の代表的事例をとりあげ、地域の文化遺産の特性に即した「自然災害への備え・行動計画」にとりまとめた、とのことである。

会議には、海外からはインドネシアとパキスタンから政府側と大学側各1名の専門家計4名が近年の地震災害等に関連した事例報告を行ない、またイクロムからブシュナキ所長・キング部長が基調講演や特別講演を行なった。日本側からは、文化庁・大学・財団・企業などの専門家が、主として歴史的建造物の構造的な解析・補強・これらに関わる政策などの報告を行なった。

以下、そのタイトルと発表者を列挙する。17日：基調講演 I 「文化遺産防災対策の国際的動向」 Joseph King (ICCROM)、II 「地震国の文化遺産にみる耐震性能と構造修復」花里利一 (三重大学)、事例報告1「文化財建造物の耐震対策」長谷川直司 (文化庁)、2「伝統的木造建築の構造補強」富永善啓 (文化財建造物保存技術協会)、3「日本における非木造文化財建造物の耐震補強事例」林章二 (清水建設)。18日：事例報告4「中部ジャワ地震後のジョグジャカルタおよびボタクデの歴史的町並みの復興プロセス」 Adishakti Laretna (インドネシア/ガジャマダ大学)、5「中部ジャワ地震によるプランバナン寺院の被害とインドネシアの石造建造物の災害対策」 Inajati Adrisijanti (インドネシア/ガジャマダ大学)、6「ラホール城・シャーリマール庭園における自然災害対策」 Maqsood Ahmad (パキスタン/政府考古局)、7「伝統技術と地域コミュニティを活用した北部パキスタンでの震災復興」 Sajida Vandal (パ



キスタン／パンジャブ歴史・芸術・建築トラス教授)、特別報告「文化遺産危機管理にかかるイクロムの取り組み」Mounir Bouchenaki (イクロム所長)。

また、会議の準備運営は、コーディネーター：益田兼房(立命館大学)、Joseph King (イクロム)、モデレーター：稲葉信子(東京文化財研究所)、梅津章子(文化庁)、宇高雄志(兵庫県立大学)、増井正哉(奈良女子大学)、大和智(筑波大学)、西村康(ACCU文化遺産保護協力事務所)が担当した。

シルクロード世界遺産登録に関するシンポジウム(中国、西安市)出席報告

CIIC(文化の道ISC) 大野 渉(プレック研究所)

1. シンポジウム概要、出席者

平成19年(2007年)10月30日～31日に中国西安市で開催されたシルクロードの世界遺産登録に関するシンポジウムに出席しましたのでその様子を簡単にご報告します。

本シンポジウムは、中国語のタイトルは「絲綢之路申報世界文化遺産系列活動会議」(英語タイトルは“International Symposium for the Serial Nomination for the Silk Roads to the World Heritage”)で、イコモス、中国国家文物局(SACH)、陝西省人民政府、西安市人民政府の主催、UNESCO世界遺産センターの後援により開催されたものです。本シンポジウムの直前に同じ場所で、大明宮遺跡での宮殿再建の方法に関するシンポジウム「国立大明宮遺跡公園建設国際シンポジウム」が開催されており、こちらには国士館大学岡田保良先生(ICOMOS執行委員)、京都市立芸術大学池上俊郎先生が出席されました。

シンポジウムにはイコモス国内委員会の前野委員長、杉尾副委員長、西村副委員長が招待されましたが、開催直前の連絡だったこともあり調整がつかず、前野委員長の代理として前田耕作先生が出席され、杉尾副委員長の代理として私

が出席させていただくこととなりました。また、東京文化財研究所の山内和也氏が日本から出席されました。

中国国内の関係者を中心とする約80名が出席し、中国と共同で世界遺産登録の準備を進めている中央アジア国4カ国のうちカザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタンが出席しました。タジキスタンは欠席しており、関係国間で今でもこの動きに関して温度差があるというような話も会議場外で聞こえてきました。

イコモス本部からは、Petzet委員長(独)のほか、郭副委員長(中国)、Kristal Buckley副委員長(豪)、Sheridan Burke前副委員長(豪)、Giora Solar氏(イスラエル)が出席し、文化遺産の保存管理の考え方等について説明していました。

中国当局及びUNESCO世界遺産センターと共にシルクロード世界遺産登録のコンセプト作りに携わってきた英国イコモスのHenry Cleere氏とSusan Denyer氏も出席していました。また、専門家として米国ボストン大学教授のMohammad Rafique Mughal氏が招待されパキスタンの関連遺跡について紹介されました。

シンポジウムに併行して、10月27日から11月1日までの間にシルクロードの共同登録にむけた関係者のトレーニングが行なわれていました。

2. シルクロード世界遺産登録のこれまでの動き

今回のシンポジウムでの説明によると、シルクロードを世界遺産に登録しようという動きは、中国では1980年代にさかのぼり、これまでUNESCO世界遺産センターの支援を得て関連調査、協議がすすめられてきました。1996年に暫定リストに中国国内のシルクロードを登録してのち、実際の登録は実現していませんが、最近のシリアルノミネーションや文化的景観、文化の道に関する動きに刺激されて、中央アジアの国との共同推薦という方向で調整が進められ、英国イコモスのHenry Cleere氏、Susan Denyer氏によるコンサルテーションを受けて、そのコンセプトがまとめられたところです。

これまでの主要な動きを以下に年表でまとめます。

表 中国・中央アジアシルクロード世界遺産登録に関する
取り組み年表

1988年 UNESCOによる調査 (Integral Study of the Silk Roads: Roads of Dialogue) 開始

- 1990年7月～8月 砂漠ルート (西安～Kashgar)
- 1990年10月～1991年3月 海洋ルート (ヴェニス～大阪)
- 1991年4月～6月 ステップ草原ルート (中央アジア)
- 1992年7月～8月 遊牧民ルート (モンゴル)
- 1995年9月 仏教のルート (その1) (ネパール)

1996年2月 中国が自国の暫定リストに「シルクロード (中国区間)」 (The Silk Road (Chinese Section)) を登録

2003年8月～2004年7月 中国国内のルート調査 (オランダ・ラスト基金) *この調査は、Feng Jing & R. van Oers. UNESCO Missions to Chinese Section of the Silk Road. A Systematic Approach Towards World Heritage Nomination. (UNESCO Report CLT-2006/WS/10) にまとめられている。また、Heritage Review, No.39, March 2005. にこの時の記事がある。

2005年11月 UNESCO Sub-Regional Workshop (Almaty, カザフスタン)
“Central Asia Silk Roads” のシリアルノミネーションに関するアクションプラン

2006年8月 Stakeholders Consultation Workshop (トゥルファン、中国)

2006年10月 UNESCO Sub-Regional Workshop (サマルカンド、ウズベキスタン) 中央アジアと中国でのシルクロード世界遺産登録に向けた戦略について合意

2007年4月 UNESCO Sub-Regional Workshop
中国、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、ウズベキスタンの5カ国でコンセプトペーパー (A Concept for the Serial Nomination of the Silk Roads in Central Asia and China to the World Heritage List) を採択

2007年10月 シルクロード世界遺産登録に関するシンポジウム及び関係者トレーニング (西安、中国)

3. シルクロード世界遺産登録の今後の動き

今後は、以下の予定で関係国における作業が進められます。来年の世界遺産委員会でコンセプトペーパーが発表されるそうです。その後、2009年1月末の推薦書提出を目指

すとのことですが、シンポジウムに出席した印象ではこの目標はかなり野心的な目標だと思います。

表 中国・中央アジアシルクロード世界遺産登録に関する
今後の予定

- 2008年7月 ケベック世界遺産委員会でコンセプトペーパーの発表
- 2008年9月 推薦書の仮提出
- 2009年1月 世界遺産推薦書提出 (2カ国以上の参加で一部区間をまず推薦する)
- 2010年7月 世界遺産委員会での審議

現在のシルクロード登録の動きは、西安を起点として西側に延びる中国国内の関連48資産と中央アジア4カ国の関連資産を共同でシリアルノミネーションすることを基本的な姿勢として進められています。

これは、「道」自体を線として登録するのではなく、「道」に関連した個々の資産 (点) を連続して登録する考え方と言えます。シルクロードの「道」自体はルートの確定が難しいことや「道」としては残っていない場合が少なくないことから、このような考え方で進められているのですが、ICOMOSのベチェット委員長はできるだけ道は線として登録するべきであるという考えを示し、コンセプトの作成に関わってきたUNESCO世界遺産センターグループ (Henry Cleere氏ほか) との考えの違いが明らかになりました。

また、シルクロードの範囲についても、現在推薦が検討されている範囲の西側に拡大することを、イタリアは要望しているようですし、日本につながる東側のルートも含めた検討をすべきという意見も当然あります。このシンポジウムにおいても出席していた前田先生がそのような提案をされました。しかし、中国側 (地元西安の関係者) は、とにかく1日でも早く中国と中央アジアのシルクロードについて世界遺産登録を実現することに集中したいということで、将来の拡大の可能性についてすら言及することに抵抗を示していました。1996年の暫定リスト登録から10年が経過している上、暫定リストに55件もの候補がある中国では推薦にこぎつけるのも競争が厳しいでしょうから、しびれをきらすのもしかたないかも知れません。



それでも、遅かれ早かれ、中国からパキスタンからインドへ延びるルートや、モンゴルへ向けて北へ延びるルートも含めて、シルクロード全体を視野に入れた動きに発展していくことは間違いないでしょう。

注：「シルクロード」の呼称について

「シルクロード」の英語表現は“Silk Road”のほか、陸上の道だけでなく海上のルートも意識して“Silk Route”という表現が使われることもあります。現在、中国と中央アジア4カ国によりまとめられているコンセプトでは、「シルクロード」という言葉のはじまりとしてドイツ人地理学者のFerdinand von Richthofen 男爵が1877年に使ったドイツ語 Seidenstrassen（複数形）をひいて、Silk Roads（複数形、色々なルートが存在する）を使用することになっています。

2007年イコモス・プレトリア会議報告

イコモス執行委員 岡田保良
(国士舘大学イラク古代文化研究所)

去る10月6日から8日間にわたって南アフリカ・プレトリアで開催された一連のイコモス会議の全体を括る名称はない。基本的には定例の諮問委員会が年々拡大されてきたものだが、配布されたプログラムの表題は、Scientific Symposium, Scientific Council, Bureau, Advisory Committee and Executive Committee, Pretoria 2007とあり、会場にはプレトリア大学キャンパスのいくつかの建物が充てられたので、便宜的に「2007プレトリア会議」としておく。出席登録者数は73、日本からは前野委員長と筆者が出席した。以下はその日次録である。

10月5日朝、前野先生とともにヨハネスバーグ空港着。空港ロビーで、かねて懇意の中国イコモスのグォ・ツァン氏と遭遇、イコモス本部が推薦するプレトリアのホテルまで1時間

弱、タクシーを駆る。この日はまだ公式プログラムはなく、準備に追われる南ア・イコモスのK.バッカー教授の好意を受ける。夕食にはカナダのミシェル・ボネ氏も帯同し、1年後に控えた総会の準備状況をうかがった。

6日の第1日目、午前中に市の中心部、教会広場 Church Squareを訪ねる。午後、バッカー教授の建築系教室で全アフリカ・イコモスが集うはずの会議が予定されていたが、主催国の南アフリカ以外の国からの参加は、事前の登録にもかかわらず、執行委員会の一員でもあるモーリシャス1カ国のみ。筆者を含めてオブザーバーだった執行委員による、南アフリカの事情聴取の如くであった。文化遺産の保存は社会問題のひとつという発言が余韻を残した。

7日は学術シンポジウム Scientific Symposium。地球規模の気候変動 Global Climate Change（略してGCC）をテーマとして、以下のとおり10本の発表があった（タイトル主旨のみ、発表順）。

①文化遺産への影響全般 ②侵食による極地遺産の危機
③カナダ、ヨークでの河川侵食 ④カテリーナによるニューオーリンズ被害 ⑤乾燥地域の実状 ⑥デリーでの「危機対策会議 ICORP」報告 ⑦太平洋域での影響 ⑧近年のオーストラリア ⑨アルゼンチンとカナダとの協力によるウシュアエア遺跡の記録 ⑩今夏のギリシア。

8日は昨年から定例化された学術評議会 Scientific Council (SC)。①このSCを規定する「エゲル・西安原則 Eger-X'ian Principles」の最終案確定 ②各学術委員会の活動報告 ③ Presentation and Interpretation Charter と Cultural Route Charter 承認 ④ SC 主導のテーマ、等々について議論が交わされた。

9日は諮問委員会第1日。議長は昨年エディンバラで選出された諮問委員会委員長 J. ハード氏。土の建築 ISC の委員長でもあるので筆者も馴染みの英国紳士。議事次第採択の折、ノルウェーイコモスから、イコモスとしては若干不透明な近年の諸問題について質問状が提出され、紛糾すら予感される緊張が走ったが、議長以下、真摯な対応によって議事は順調に進んだ。午後は2部構成で、前半は「地域会議」に充てられ、中国、韓国、カザフスタン、オーストラリアの代表らとともに、用意された別室に集合。各国が過去1年を回顧し、懸案事項等を話し合った。座長はオーストラリア

のクリスタル・バクリー氏。日本からは前野先生が、鞆の浦の危機的状況や、モニタリング体制の必要を訴えた。ウェブサイトの公開には拍手があった。

同日午後の後半は、昨年のエディンバラで設置された4つの分野別タスク・チームの会議。私たち日本は世界遺産条約における各国イコモスのあり方に関する第4チームに属し、事務局があらかじめ用意した設問項目などについて、十数カ国の代表が意見交換。英国イコモスのドナルド委員長が座長を務めた。他の3分野とは、第1: 会員と規約、第2: 各国委員会の地域内協調、第3: 各国委員会と学術委員会との関係。

10日は諮問委員会第2日。午前は前日の地域会議とタスク・チームそれぞれの代表者が各ミーティングの概要を報告。つづいて財務担当役員 G. ソラール氏から経理状況の報告。午後は以下の報告。

- 1) 事務局担当ガイア・ユングプロット氏から、事務局員の異動や本部移転の案など庶務について。
- 2) 前日の地域会議報告。パメラ・ジェローム氏から南北アメリカ、フィリップ氏からアフリカ、アジア・太平洋はK. バクリー氏、ヨーロッパはT. フェジェルデイ氏。
- 3) P. ジェローム氏による8日に開催された学術評議会の報告。
- 4) T. フェジェルデイ氏から世界遺産ワーキンググループによる世界遺産候補審査手続きの改善努力について報告。以上のほか、2008年4月のMonument Dayのテーマを「宗教遺産と聖地」とする提案、ケベック総会の日程紹介など続き、諮問委員会は閉幕。

11日は終日バスツアー。教会広場に面する保存建物を見学後、ヨハネスバーグに移動。革命記念の広場、博物館として開放されている旧女囚刑務所、大法廷を相次いで見学。夕刻にプレトリアに戻り、「自由の山会館」で地元主宰の歓迎パーティーに出席。

12日には前野委員長が一足先に帰国の途に向かい、岡田は終日、プレトリア大学での執行委員会に出席。1年に2度開催される定例会の一つ。この日配布された資料の中には、2008年度に審査される世界遺産候補一覧があり、日本の平泉を含む25の新規登録候補と3件の拡張申請が判明した。これらの審査はパリのイコモス本部で開催する世界遺

産パネル World Heritage Panel に委ねられるが、従来のように年明け1月に執行委員会とパネルを合わせて開くのではなく、今回から試みにパネルのみ2ヶ月近く繰り上げて11月末にパリで開催することになった。これに伴って次回の執行委員会は年明け3月に繰り下げられることも決まった。

13日(土)も執行委員会は続いたが、週明け早々に文化庁の暫定遺産委員会が控えていたため、岡田は欠席を詫び、朝、空港に向かった。この日の議事を含む会議内容はすでに議事録として各委員に送付されている。

以上のように、諮問委員会の会議として召集されながらも、シンポジウムに始まり、評議会やタスク・チーム会議など新しく派生的に設けられた会合が相次ぎ、時間に追われつづけた今回のプレトリア会議であった。2008年度は総会に合わせてケベックでの開催が決まっている。成田帰着は15日(月)早朝、都合12日間に及ぶ出張だった。経費を全面的に支弁していただいた文化財保護・芸術研究助成財団に厚く感謝するしだいです。

「朝鮮通信使の道」展

朝鮮通信使の道に関する小委員会 主査
三宅理一 (慶應義塾大学)

2007年は朝鮮通信使訪日400周年であり、日韓各地でさまざまなイベントが行なわれたが、その最後を飾ったのが、日本イコモス国内委員会と日本建築学会が共同で実施した「朝鮮通信使の道」展(2007年12月20日～2008年1月20日)ならびにそれに付帯するシンポジウム(1月12日)であった。

朝鮮通信使は、徳川将軍の交替にともない、朝鮮王室から慶賀のための外交使節として江戸に派遣された外交団で、近年その再評価が著しい。500人前後の朝鮮外交団に加えて、嚮導役の対馬藩士、各藩の随行員など、都合1500人が海路と街道を約10ヶ月をかけて動くことから、通信使の往



来は華やかなページェントを散りばめた国際イベントとなり、多大の施設やインフラの整備をとまなうこととなった。そうした建築物や土木構築物の中には今日まで継続されているものも少なくなく、全体で「朝鮮通信使遺産」とでも呼べるような遺産の系をかたちづけている。本展覧会は、日韓にまたがるこれらの遺産に着目し、その形成プロセスと利用のされ方、その後の継承の仕組み等について「日韓共同遺産」という見方から再評価を行なった。展示物としては、朝鮮通信使に関わる古地図、絵図、指図、写真、遺産の復元図、模型など、100点あまりが、田町の建築会館建築博物館に展示された。

シンポジウムには日韓の専門家を招き、市民の立場と学術的観点を織り交ぜながら、多角的に朝鮮通信使の遺産を論じた。とりわけ、釜山に設けられた対馬藩の居留地「倭館」の実態と復元をめぐる議論が沸き、江戸時代に日本と朝鮮の間で共同の建設体制が敷かれ、相当レベルの技術交流がなされたことが新たな知見として提出された。

なお、この展覧会は、今後国内各地を回り、韓国でも展示される予定である。

お知らせ

2008年ICOMOSケベック総会・シンポジウム

参加を予定されている会員は、日本イコモス国内委員会事務局までご一報下さい。

総会・国際シンポジウム・国際フォーラムなどに関する登録情報が発表されました。日本イコモス国内委員会のホームページからもアクセスできます。

詳しくは、下記ウェブページをご覧ください。

英語：http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/02_nouvelles.htm

仏語：http://www.conferium.com/Clients/icomos/fr/02_nouvelles.htm

西語：http://www.conferium.com/Clients/icomos/es/02_nouvelles.htm

表 2008年ICOMOSケベック総会・シンポジウムのREGISTRATION RATES (参考)

(http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/03_tarifs.htm より抜粋)

登録費の割引は2008年7月15日まで。カナダドルでの表示になります。

Participants	before July 15,	after July 15,	after September
	2008	2008	15, 2008
Members more than 30 years old	450 \$ CDN	500 \$ CDN	600 \$ CDN
Non-members more than 30 years old	500 \$ CDN	550 \$ CDN	650 \$ CDN
Members 30 years old and less	300 \$ CDN	300 \$ CDN	300 \$ CDN
Non-members 30 years old and less	350 \$ CDN	350 \$ CDN	350 \$ CDN
Registration - one day	300 \$ CDN	300 \$ CDN	300 \$ CDN
Forum only *	100 \$ CDN	100 \$ CDN	100 \$ CDN
Forum and Symposium *	200 \$ CDN	200 \$ CDN	200 \$ CDN
Program - accompanying person	300 \$ CDN	300 \$ CDN	300 \$ CDN

* 若手研究者・プロフェッショナルを対象とするフォーラム (専門分野は問わない)

登録費の詳細は下記ウェブページをご覧ください、ご本人
では是非ご確認下さい。

http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/03_tarifs.htm

登録：ウェブサイトから行なっていただく事になります。

他の登録方法や小切手での振込については下記にお問い
合せ下さい。

ICOMOS Québec 2008

Hospitalité Québec

580 Grande-Allée Est, #140

Québec (Québec) Canada, G1R 2K2

あるいはファクスで：+(418) 529-7548

国際シンポジウム “THE SPIRIT OF PLACE — BETWEEN THE INTANGIBLE AND THE TANGIBLE”

シンポジウムのテーマ：THE SPIRIT OF PLACE — BE-
TWEEN THE INTANGIBLE AND THE TANGIBLE

アブストラクト応募期限は2008年3月1日で、すでに締め
切られました。

アブストラクト審査結果（口頭発表・ポスター）通知：2008
年4月

フルペーパー締め切り：2008年7月15日

詳細は以下をご覧ください。

●テーマ：[http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/pdf/
Appel-then.pdf](http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/pdf/Appel-then.pdf)

●応募（アブストラクト、フルペーパー）詳細：

[http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/
05_appelconferences2.htm](http://www.conferium.com/Clients/icomos/en/05_appelconferences2.htm)

参加を予定されている会員は、日本イコモス国内委員会
事務局までご一報下さい。

International Day for Monuments and Sites 2008

例年の International Day for Monuments and Sites（4月
18日）、今年のテーマが発表されました。

昨年に習い、日本イコモスでも今年のテーマに沿ったイベ
ント・研究会の開催を予定しております。詳細が決まり次第、
ご案内申し上げます。

会員・非会員を問わず、ふるってご参加くださいますようお
願い申し上げます。

詳細は、下記ウェブサイトをご覧ください。

<http://www.international.icomos.org/18thapril/2008/>

18 April 2008 - The International Day for Monuments
and Sites: Religious heritage and sacred places

The International Day for Monuments and Sites was created
on 18th April, 1982, by ICOMOS and later approved at the
22nd UNESCO General Conference in 1983. This special day
offers an opportunity to raise public awareness concerning
the diversity of the world's heritage and the efforts that are
required to protect and conserve it, as well as to draw atten-
tion to its vulnerability. For several years now, ICOMOS sug-
gests a topic to be highlighted on this occasion, among the
multiple dimensions which make up the vast subject that is
the cultural heritage we care for. This has allowed our mem-
bers and our committees to hold activities, conferences, col-
loquia or other events to raise awareness on this cultural heri-
tage among the public, the owners or the public authorities by
linking a global theme to local or national realities.

This year, to mark the 18th April, ICOMOS encourages its
National Committees, its International Scientific Committees
and members to organise activities with regards to the theme
Religious heritage and sacred places

A universally present dimension, religious practices and be-
liefs have led human societies to mark their spaces, build
places, carry out works or build up archives loaded with mean-
ing and memories making it one of the most important com-



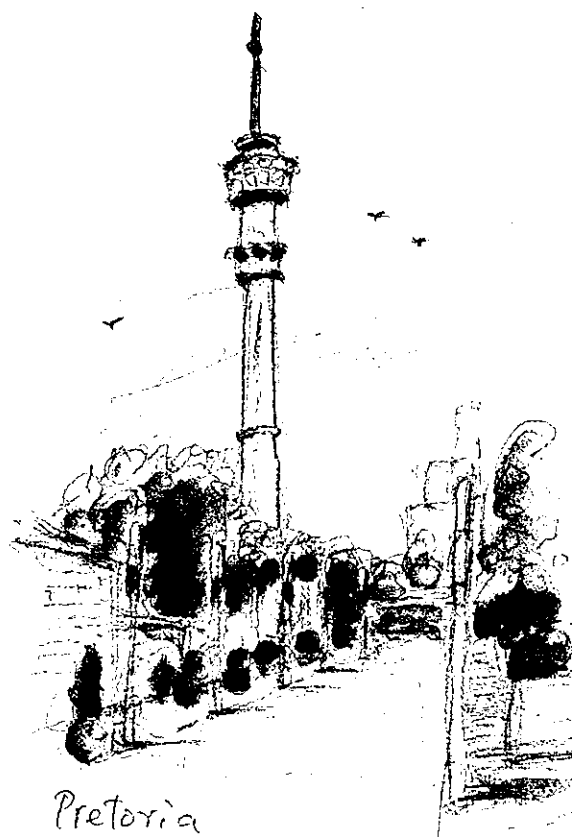
ponents of the heritage in today's world. This theme expresses itself in landscapes through place names, or rites and pilgrimages linked to certain natural elements. In addition, in creating this heritage, many past and current societies brought together the sum of all their arts and sciences in the construction of large or modest buildings and the objects they include. Nowadays, the conservation of this heritage in its heritage dimension can constitute a major challenge for a community. This raises the need to share experiences. At a time when religion is increasingly being recognized by the international community as being one of the major issues for decades to come, the 18 April 2008 will be the occasion for ICOMOS members and committees to take stock of the various dimensions of knowledge, conservation and presentation of this vast heritage. It also offers an opportunity to establish links with the authorities who own or administer places of worship and to enlist their support for ICOMOS and its principles.

In preparation for 18 April 2008, we thus invite you to devise activities and joint events to identify examples of practices or achievements worthy of sharing with your colleagues worldwide to reinforce conservation action, our foremost mission. Such collaboration could be for instance with the religious authorities responsible for these heritage places or with a public or municipal administration, a university, a school or with other associations to build bridges and initiate dialogues which will help us to communicate ICOMOS' concerns to the users of, those responsible for or researchers working on religious heritage and sacred places.

We thank you in advance for all your initiatives and ask you to inform the ICOMOS Secretariat, as early as possible, of the activities you plan to undertake for 18 April, but also to share their results with us (programme, participation, declarations, and publications). This will help us to disseminate information and to gather conclusions on all your activities, so as to be able to testify of the vitality of ICOMOS' network. In the coming weeks and months, the ICOMOS International Secretariat will be further developing these special web pages to provide you with more ample information on this year's

theme. Please consult them regularly!

Contact: Volker Zimmermann, ICOMOS International Secretariat — zimmermann@icomos.org



日誌 事務局

(2007年11月17日～2008年2月12日)



- 12/08 日本イコモス国内委員会 2007年次第4回拡大理事会、2007年次総会、総会後研究討論会、懇親会を開催。東京都庭園美術館新館大ホールにて。述べ60名が参加。
- 12/10 益田兼房氏より「東アジア周縁部の土着の聖なる空間に関する研究」DVD(2004)を受領。
前野まさる氏より Philippines—Living landscapes and cultural landmarks—World heritage sites in the Philippinesを受領。
- 12/20～1/20 「朝鮮通信使の道」展開催(於・日本建築学会建築博物館展示ギャラリー)。日本イコモス共催。
- 12/27 第5小委員会(プロヴディフ旧市街保存事業に対する協力)会合(於 岩波書店一ツ橋ビル)。
- 2008年01/07 本部より、2008年度メンバーズカード受領(304枚)、会員へ順次発送。
日本ユネスコ協会連盟よりユネスコ vol.1113 2008.1を受領。
- 01/08 日本イコモスより前野委員長・矢野事務局長が文化庁へ挨拶。
- 01/12 「朝鮮通信使の道」国際シンポジウム開催(建築会館ホール)。前野委員長をはじめ日本イコモス会員数名が参加。日本イコモス・日本建築学会と共催。
- 01/16-19 ACCUユネスコアジア文化センター主催「国際会議 「文化遺産の危機管理II—自然災害への備えを考える—」(1/16-18)、及び「文化遺産に関する国際シンポジウム「地震・雷・火事・・・津波」」(1/19)が奈良で開催。前野委員長をはじめ日本イコモス会員多数が参加。日本イコモス後援。
- 01/19 Mounir Bouchenaki氏(ICCRROM所長)を囲む会を東京・国際会館で開催、17名が参加。
- 01/21 Michael Petzet氏(ICOMOS President)を囲む会を東京・上野で開催、16名が参加。
- 01/23 ICCROMよりICCROM Newsletter no.33 June 2007、東京文化財研究所よりTobunken News 2007 no.31を受領。
- 01/30 日本ユネスコ協会連盟より「世界遺産年報2008」を受領、会員へは3月に発送予定。
- 02/01 「第2回世界遺産フォーラム—瀬戸内in福山」が開催され、前野委員長をはじめ日本イコモス会員数名が参加。日本イコモス後援。

日本イコモス国内委員会 維持会員(代表者)

(敬称略・順不同)

株式会社 尾田組(尾田芳信)
株式会社 都市環境研究所(矢嶋啓自)
株式会社 ブレック研究所(杉尾伸太郎)
株式会社 トリアド工房(伊藤民郎)
西武建設株式会社(大澤茂治)
北野建設株式会社(北野次登)
株式会社 小林石材工業(小林美和)

株式会社 鴻池組(大岩祥一)
株式会社 乃村工務社(乃村義博)
株式会社 文化財保存計画協会(矢野和之)
「国宝松本城を世界遺産に」推進委員会(有賀正)
株式会社 京都科学(片山保)
「善光寺の世界遺産登録をすすめる会」(仁科恵敏)

日本イコモス国内委員会の活動には以上の企業・団体のご支援をいただいております。

●日本イコモス国内委員会 理事会 JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	前野 まさる	Masaru MAENO
Vice President	副委員長	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
Secretary General Trustees	事務局長 理事	西村 幸夫	Yukio NISHIMURA
		矢野 和之	Kazuyuki YANO
		赤坂 信	Makoto AKASAKA
		小野 昭	Akira ONO
		河野 俊行	Toshiyuki KONO
		黒田 乃生	Nobu KURODA
		清水 真一	Shinichi SHIMIZU
		杉尾 邦江	Kunie SUGIO
		鈴木 博之	Hiroyuki SUZUKI
		田中 哲雄	Tetsuo TANAKA
		田辺 征夫	Yukio TANABE
		西浦 忠輝	Tadateru NISHIURA
		濱崎 一志	Kazushi HAMAZAKI
		益田 兼房	Kanefusa MASUDA
		宮城 俊作	Shunsaku MIYAGI
		Auditors	監事
沢田 正昭	Masaaki SAWADA		
前田 耕作	Kosaku MAEDA		
Advisors	顧問	石井 昭	Akira ISHII
		伊藤 延男	Nobuo ITO
		坪井 清足	Kiyotari TSUBOI

小委員会 WORKING GROUPS

Chiefs	主査	藤井 恵介	Keisuke FUJII
		稲葉 信子	Nobuko INABA
		石井 昭	Akira ISHII
		三宅 理一	Riichi MIYAKE
		益田 兼房	Kanefusa MASUDA
		西村 幸夫	Yukio NISHIMURA
		崎谷 康文	Yasufumi SAKITANI

●国際諸委員会参加者 REPRESENTATIVES TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Executive Member	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
Advisory Committee	前野 まさる	Masaru MAENO
ISC on:		
Archaeological Heritage Management	小野 昭	Akira ONO
Analysis and Restoration	岸本 雅敏	Masatoshi KISHIMOTO
	花里 利一	Toshikazu HANAZATO
Historic Towns and Villages	坂本 功	Isao SAKAMOTO
	西澤 英和	Hidekazu NISHIZAWA
	福川 裕一	Yuichi FUKUKAWA
Underwater Cultural Heritage Training	上野 邦一	Kunikazu UENO
	荒木 伸介	Shinsuke ARAKI
Cultural Landscapes	稲葉 信子	Nobuko INABA
	工楽 善通	Yoshimichi KURAKU
Vernacular Architecture	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
	本中 眞	Makoto MOTONAKA
Wood	前野 まさる	Masaru MAENO
	大野 敏	Satoshi OHNO
Earthen Architecture	伊藤 延男	Nobuo ITO
	渡邊 保弘	Yasuhiro WATANABE
Cultural Tourism	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
	宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
Legal Issues	石井 昭	Akira ISHII
	河野 俊行	Toshiyuki KONO
Heritage Documentation	山田 修	Osamu YAMADA
	杉尾 邦江	Kunie SUGIO
Cultural Routes	大野 渉	Wataru OHNO
	西浦 忠輝	Tadateru NISHIURA
Stone	石崎 武志	Takeshi ISHIZAKI
Risk Preparedness	益田 兼房	Kanefusa MASUDA
Rock Art	小川 勝	Masaru OGAWA
	五十嵐ジャンヌ	Jannu IGARASHI



JAPAN ICOMOS/INFORMATION

Vol.7, No.5 14 MARCH 2008

日本イコモス国内委員会 委員長 前野まさる

事務局担当理事 矢野和之 編集 赤坂 信

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 岩波書店一ツ橋ビル 13階

株式会社 文化財保存計画協会 気付

Tel & Fax: 03-3261-5303 e-mail: jpicomos@japan-icomos.org

<http://www.japan-icomos.org/>

JAPAN-ICOMOS National Committee Secretariat

c/o Japan Cultural Heritage Consultancy

Hitotsubashi 2-5-5-13F, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0003, Japan

Tel & Fax: +81-3-3261-5303 e-mail: jpicomos@japan-icomos.org

<http://www.japan-icomos.org/>